

大鎧遺跡・倉谷古墳群

－福岡県京都郡苅田町大字山口所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書 第140集

1999

福岡県教育委員会

おおよろい くらたに
大鎧遺跡・倉谷古墳群

－福岡県京都郡苅田町大字山口所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書 第140集

1999

福岡県教育委員会

序

ここに報告する遺跡は、主要地方道苅田採銅所線改良工事に伴って発見・調査された遺跡です。大鎧遺跡は圃場整備事業で地区除外となった山麓で発見された集落遺跡で、周辺の丘陵に無数に存在する古墳群と同時期の生活の一端を垣間みることができました。また、倉谷古墳群は急峻な斜面に築かれた小古墳群で、その性格を推し量る資料をえることができました。

発掘調査・報告書作成にいたる間には福岡県行橋土木事務所・苅田町・同教育委員会の諸機関をはじめとして、地元有志の方々のご協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

また、本書が教育・研究、文化財愛護思想の普及にわずかなりとも寄与できれば望外の喜びとするところであります。

平成11年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

1. 本書は、主要地方道荻田採銅所線改良工事に伴って発掘調査を実施した、京都郡荻田町大字山口に所在する大鎧遺跡・倉谷古墳群の報告である。
2. 発掘調査・報告書作製は、福岡県土木部道路建設課の執行委任を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課（旧指導第二部文化課）が実施した。
なお、調査・報告書作製に関して福岡県行橋土木事務所、荻田町、同教育委員会の多大なご協力を得た。
3. 出土遺物は、福岡県立九州歴史資料館において、土器類を文化財保護課岩瀬正信氏の、金属器を同館学芸課長横田義章氏の指導の下で、整理・復原を行った。
4. 掲載した図は、遺構を飛野・中原博（現行橋市教育委員会）・植山智保子・前田智恵美・内野陽子・塚内トシエ・国永敏枝・坂本千恵子・渡辺八重子・緒方恵子が、遺物は飛野・西田美代子・岡泰子・辻啓子・原富子・丸山小夜子・大野愛里が作製したものを、豊福弥生・原カヨ子が製図を行ったものである。
5. 掲載した写真は、遺構を飛野が、遺物は九州歴史資料館において同館参事補佐石丸洋氏の指導の下、文化財課北岡伸一氏が撮影したものを使用した。
なお、空中写真は㈱フォト・オオツカによる。
6. 使用した方位は主として磁北である。それ以外については特記した。
7. 本書の執筆・編集は飛野が行った。

本文目次

	頁
I. はじめに	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の内容	8
1 大鎧遺跡	8
2 倉谷古墳群	29
IV. おわりに	48

図版目次

図版 1 上; 倉谷古墳群遠景 (南から)

下; 大鍬遺跡遠景 (東から)

大鍬遺跡

図版 2 上; 全景 (北上空から)

下; 全景 (北東上空から)

図版 3 上; 1号竪穴式住居跡 (北から)

下; 同カマド周辺 (北東から)

図版 4 上; 2~7号竪穴式住居跡 (北から)

下; 3~5号竪穴式住居跡 (南東から)

図版 5 上; 2号竪穴式住居跡 (南東から)

下; 3号竪穴式住居跡 (北東から)

図版 6 上; 4号竪穴式住居跡遺物出土状態 (南東から)

下; 5号竪穴式住居跡カマド (南東から)

図版 7 上; 6号竪穴式住居跡 (南東から)

下; 同遺物出土状態 (北西から)

図版 8 上; 8号竪穴式住居跡 (北東から)

下; 9号竪穴式住居跡 (南から)

図版 9 上; 石戈出土状態 (南から)

下; 同 (南西から)

図版10 出土遺物 1 (1・2号竪穴式住居跡)

図版11 出土遺物 2 (2・3号竪穴式住居跡)

図版12 出土遺物 3 (4・5号竪穴式住居跡)

図版13 出土遺物 4 (6・7・5~7号竪穴式住居跡)

図版14 出土遺物 5 (その他の出土遺物)

倉谷古墳群

図版15 上; 遠景 (南東から)

下; 全景 (南東上空から)

図版16 上; 1・2号墳全景 (上空から)

下; 1号墳現況 (東から)

図版17 上; 1号墳全景 (南から)

下; 同石室 (南東から)

図版18 上; 2号墳全景 (南西から)

下; 同石室 (第二次床面、南から)

図版19 上; 2号墳第一次床面 (東から)

下; 同石室全景 (南東から)

図版20 上; 3・4号墳全景 (上空から)

下; 3号墳現況 (北から)

図版21 上; 3号墳北西トレンチ (西から)

下; 同石室 (南東から)

図版22 上; 3号墳石室 (西から)

下; 同閉塞 (南西から)・玄門 (北東から)

図版23 上; 4号墳現況 (南から)

下; 同天井石露出状態 (北から)

図版24 上; 4号墳西トレンチ (南西から)

下; 同北トレンチ (北から)

図版25 上; 4号墳閉塞状態 (南東から)

下; 同部遺物出土状態 (北西から)

図版26 上; 4号墳石室 (南東から)

下; 同第一次床面 (東から)

図版27 上; 4号墳石室左側壁 (東から)

下; 同右側壁 (南から)

図版28 上; 4号墳石室内遺物出土状態 (南東から)

下; 同奥壁付近 (南東から)

図版29 4号墳石室内左側壁 (上)・右側壁 (下) 付近遺物出土状態 (東・南から)

図版30 上; 4号墳第一次床面奥壁付近 (南東から)

下; 同遺物出土状態 (東から)

図版31 上; 4号墳墳丘遺物出土状態 (南西から)

下; 同周溝内遺物出土状態 (南から)

図版32 上; 5号墳全景 (南東から)

下; 同石室 (南東から)

図版33 出土遺物 1 (耳環・鉄製品)

図版34 出土遺物 2 (4号墳出土土器1)

図版35 出土遺物 3 (4号墳出土土器2・その他の出土遺物)

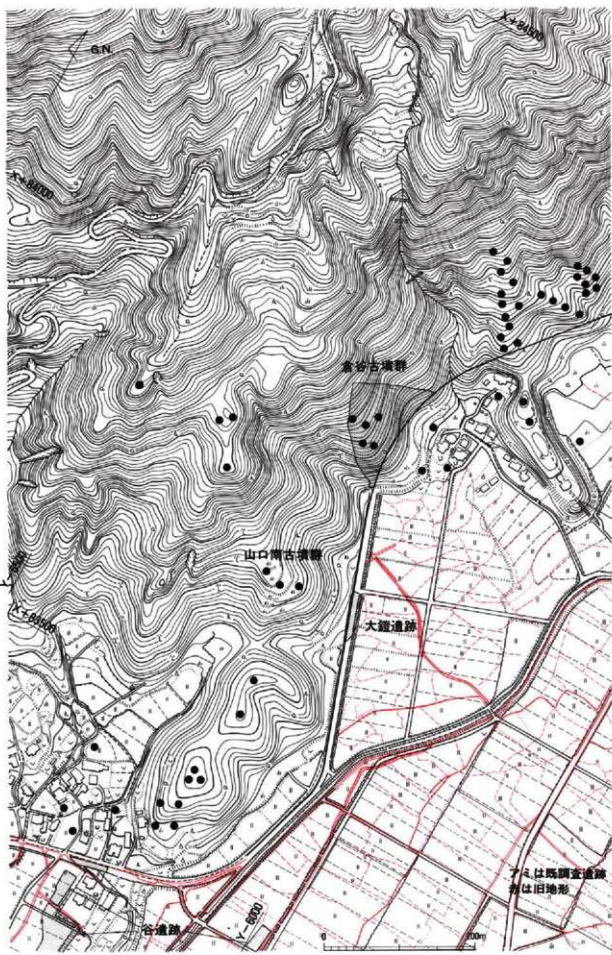
挿図目次

	頁
第1図 周辺地形図 (1/5,000)	v
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第3図 調査区周辺地形測量図 (1/1,500)	7
大鍬遺跡	
第4図 大鍬遺跡遺構配置図 (1/300)	7
第5図 1号竪穴式住居跡実測図 (1/40)	8
第6図 1号竪穴式住居跡出土遺物実測図1 (1/3)	9
第7図 1号竪穴式住居跡出土遺物実測図2 (1/3)	10
第8図 2号竪穴式住居跡実測図 (1/40)	11
第9図 2号竪穴式住居跡出土遺物実測図1 (1/3)	12
第10図 2号竪穴式住居跡出土遺物実測図2 (1/3)	13
第11図 2号竪穴式住居跡出土遺物実測図3 (1/3)	14
第12図 3号竪穴式住居跡実測図 (1/40)	14
第13図 3号竪穴式住居跡出土遺物実測図 (1/3、1/2)	15
第14図 4・5号竪穴式住居跡実測図 (1/40)	16
第15図 4号竪穴式住居跡出土遺物実測図 (1/3)	18
第16図 5号竪穴式住居跡出土遺物実測図 (1/3)	19
第17図 6号竪穴式住居跡実測図 (1/40)	20
第18図 6号竪穴式住居跡出土遺物実測図 (1/3)	21
第19図 7号竪穴式住居跡出土遺物実測図 (1/3)	21
第20図 7号竪穴式住居跡および周辺部実測図 (1/40)	22
第21図 5～7号竪穴式住居跡出土遺物実測図 (1/3)	23
第22図 8号竪穴式住居跡出土遺物実測図 (1/3)	24
第23図 8・9号竪穴式住居跡実測図 (1/40)	25
第24図 その他の出土遺物実測図1 (1/3)	26
第25図 その他の出土遺物実測図2 (1/3)	27
倉谷古墳群	
第26図 倉谷古墳群現況地形測量図 (1/400)	28
第27図 1号墳調査後地形測量図 (1/200)	29
第28図 1号墳土層図 (1/80)	30
第29図 1号墳石室実測図 (1/40)	30
第30図 2号墳調査後地形測量図 (1/200)	30
第31図 2号墳土層図 (1/80)	31
第32図 2号墳出土遺物実測図 (1/2)	31
第33図 2号墳石室実測図 (1/40)	32

第34図	3号墳土層図 (1/120)	33
第35図	3・4号墳調査後地形測量図 (1/200)	34
第36図	3号墳石室実測図 (1/40)	35
第37図	3号墳出土遺物実測図 (1/2)	36
第38図	4号墳土層図 (1/80)	37
第39図	4号墳周溝内土坑実測図 (1/20)	38
第40図	4号墳石室実測図1 (1/40)	折込
第41図	4号墳石室実測図2 (1/40)	39
第42図	4号墳出土遺物実測図1 (1/2)	40
第43図	4号墳出土遺物実測図2 (1/3)	41
第44図	4号墳出土遺物実測図3 (1/3)	42
第45図	5号墳調査区と周溝土層図 (1/200、1/80)	44
第46図	5号墳石室実測図 (1/40)	44
第47図	その他の出土遺物 (1/3)	45



文化財安全バトルのーコマ



第1図 周辺地形図 (1/5,000)

I. はじめに

ここに報告する各遺跡の調査の契機は主要地方道荊田採銅所線の改良工事である。この道路は京都府荊田町の国道10号線を起点とし、田川郡香春町採銅所の国道322号線に至る両側2車線の道路である。前身となる道は古くから存在したようだが、昭和50年に荊田町の海岸部へ日産自動車九州工場が進出した前後から筑豊地区の旧産炭地と荊田町の臨海工業地帯を結ぶ国道10号線の短捷路として重要視されて本格的な改良工事が進められ、採銅所～行橋市域まではすでに終了している。残された最大の難所は荊田町の東（海岸部）と西（白川地区。白川は旧村名で、現在白川という地名は残っていない）を隔てる標高400mほどの山塊を越える「京都峠^{（あふたけ）}」の部分であり、現在、東西の両地区から工事がなされつつある。

本報告の遺跡が所在する白川地区については圃場整備事業に併せて拡張する部分と、まったく新規にバイパスを建設する部分とがあり、前者の一部は平成4（1992）年度に荊田町教育委員会によって調査・報告がなされた。後者では急峻な山麓および丘陵を大きく開削するために、すでにいくつかの文化財の存在が判明している。また、古代以来栄えたといわれる山岳修験の白山多賀神社（等覚寺）の麓を走ることからその関連遺跡等が新たに発見される可能性もあり、慎重な対応が求められている。

向遺跡の調査にいたる経過は以下のようである。平成5（1993）年12月、福岡県行橋土木事務所から同教育庁京筑教育事務所へ、かねてから協議中であった荊田採銅所線（6年度工事予定地）の試掘調査の依頼がなされた。試掘対象地は荊田町大字山口に属し、拡張からバイパスへ分岐する地点に近い。分岐部分から対象地の間はすでに路体工事が完了していた。ここは圃場整備事業地と山林の間の丘陵裾に位置し、現状は畑あるいは植林がなされていたが、かつては水田として利用されていたようで小規模な棚田が形成されていた。平成6（94）年5月、植林のために重機の使用が困難なことから人力で9本の試掘溝を開け、その南半で柱穴や住居跡を発見、大竈遺跡と名付けて本調査を同年10月に実施した。

倉谷古墳群は同じく大字山口にあって、全山に竹や檜類の巨木が茂る急傾斜の山林に位置する。伐開前の踏査では、鬱蒼とした山中で疑心暗鬼ながら3号墳とした古墳の存在を認めた。その後、96（8）年1月に伐開の連絡を受けて再度現地を踏査したところ、思いもかけない急傾斜地で1号墳の半壊した石室および4号墳の石室天井が露出しているのを発見した。それらの位置関係から、さらに1～2基の古墳の存在を予想して、発掘調査を実施したのは同年5～8月であった。

今後も倉谷古墳群の北に所在する古墳数基の調査が予定されており、先述したように修験関係の遺跡の調査も予想される状況の中で、報告書の刊行時期を未定としていたが、上記2遺跡の担当者が勤務地を異動したことから、今年度報告書を刊行することとなった。

なお、発掘調査、整理・報告書作成にいたる関係者は以下の通り。ただし、平成10年度に県教育庁の大規模な機構改革がなされた。それ以前の「指導第二部文化課」が「総務部文化財保護課」となり、「文化財保護室」は廃止。「調査班」が「調査第一係」・「調査第二係」に分けられた。以下

の記述では部・課・室・係の異動については触れない。

	平成7年度	8年度	10年度
福岡県教育委員会			
総 括			
教 育 長	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜
指導第二部長	丸林 茂夫	竹若 幸二	
総 務 部 長			富永 勲
文化財保護課長	松尾 正俊	石松 好雄	石松 好雄
同 参 事	柳田 康雄 (文化財保護課長)	柳田 康雄 (文化財保護課長)	柳田 康雄 井上 裕弘 (春日以技術補佐)
同課長補佐	元永 浩士	元永 浩士	角 伸幸 (審判部員)
同参事補佐	橋口 達也 (清水園地部)	橋口 達也 (南園地部)	橋口 達也 (副次第一係)
	木下 修	木下 修	中間 研志
	中間 研志	中間 研志	
		小池 史哲	
庶 務			
文化課管理課長	柴田 恭郎	黒田 一治	角 伸幸
同主任主事	柴田 恭郎	東 健二	田中 利幸
調査・報告書作製			
技 術 主 査	飛野 博文 (建築教育事務所)	飛野 博文 (建築教育事務所)	飛野 博文 (建築教育事務所)
整理担当			
技 術 主 査			伊崎 俊秋
主 任 技 師			吉田 東明

なお、発掘調査から報告書刊行にいたる間には、行橋土木事務所、菊田町・同教育委員会、行橋市教育委員会、京築教育事務所・北筑後教育事務所をはじめとする関係各位のご理解・ご協力をえることが出来た。また、いうまでもなく、発掘調査・整理作業に携わっていただいた多くの方々の参加があつてはじめてなした事業でもある。特に、真夏に実施した倉谷古墳群の調査では、古墳が山麓から最高55m余の比高の急傾斜地に位置し、登り下りにも苦労した。かつ、竹や巨木の除根にも難渋した。中でも、1・2・5号墳の調査は表土掘削からすべて人力で行い、作業員には大変な重労働であった。また、3・4号墳の表土掘削では重機を使用した、先のような地形からオペレーターには大変な作業であつたろうと思う。深く謝意を表する。

註

- 1 菊田町教育委員会「谷遺跡1-D地区」《菊田町文化財調査報告書》第19集、1993

Ⅱ. 位置と環境

ここに報告する2遺跡は、福岡県東部、周防灘に程近い京都府苅田町白川地区に所在する。「白川」は町村合併前の村称で、現在は地名としては残っていない。人鎧遺跡は大字山口1693番地ほかに、倉谷古墳群は山口1760番地ほかに所在する。

苅田町は京都府の北に位置し、北九州市（旧企救郡）に接する。東は瀬戸内海（周防灘）、北および西はカルスト地形で知られる国指定天然記念物平尾台とそれに続く山地、南は小波瀬川あるいは低丘陵をもって行橋市と接する。

町内の地形は町域東寄りに標高400mほどの山岳が南北に連なり、その東の海岸部に面する旧苅田町部と、西（内陸）に位置する旧白川村部、山岳の南にあって両者の間に位置する旧小波瀬村部に分かれる。山岳の南端は小波瀬川が西流し、その流域に沖積地が広がる。現在では小波瀬川沿い、山裾に東西を結ぶ道路が整備されているが、自動車が発達する以前は「京都峠」が大いに利用されていたという。小波瀬川下流域は古代豊前国の要港「草野津」が存在していたとされ、海岸線が入り込むとともに湿地帯が広がっていたようである。

苅田町域の文献での初山は、『日本書紀』安閑紀2年条の「膳碕・大拔・肝等・桑原・我鹿」への屯倉設置に関する記述とされ、「肝等」が「苅田」に比定されている。また、『和名抄』に「刈田郷」、「延喜式」では豊前国に「刈田郷」の設置がみえる。

「みやこ」の呼称は古く、『日本書紀』景行天皇十二年条に以下のようにある。

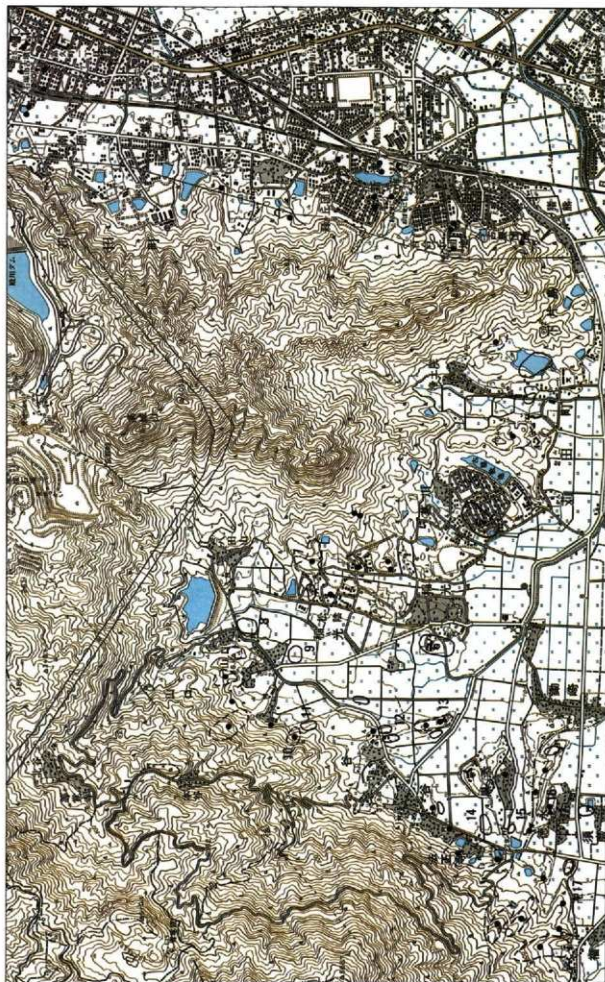
天皇遂幸筑紫、到豊前國長峽縣、興行宮而居。故號其處曰京也。

『和名抄』には「美夜古」と記され、『日本書紀』には「宮占郡小領膳臣占國」の物語が記されている。

この地域は瀬戸内海の西端、本州に対して九州の門戸に位置することから記録に登場することが少なくない。また県下でも有数の遺跡密集地帯であるが、行政発掘が定着化してまだ日が浅く、内容が明らかとなった遺跡は以外に乏しい。以下では主として発掘調査された遺跡について概観する。

縄文時代の遺跡は、苅田町浄土院遺跡・豊津町節丸西遺跡が調査された。前者は小波瀬川左岸の山麓に位置する火葬骨をおさめた後期の甕棺墓、後者はやはり後期の大規模な集落跡である。節丸西遺跡は蔵川左岸の低段丘上に位置するが、同様の立地をみせる遺跡は近年山国川にいたる豊前地方で多くが調査された。当地では後期を遡る生活遺跡はまだはっきりしないが、犀川町の山間の地では早期以降の各時期の遺物が採集されている。また、行橋市鬼熊遺跡・苅田町富久遺跡や豊津町川の上遺跡などではナイフ形石器も採集された。

地域最古の弥生土器は海岸砂丘上の行橋市長井遺跡で採集された一群とされる。小壺・夜臼型甕などが石棺墓群に伴っていたというが、発掘の手は入っていない。近年、蔵川中流域でやはり同様な土器が出土したが、環濠の一部とされる溝以外の遺構は判然としなない。前期中頃以降の遺跡は爆発的に増加する。中でも行橋市内の竹並・前田山・下利田遺跡の調査は当地域で行われた初の大規模発掘であるとともに、弥生・古墳時代に属する膨大な量の遺構・遺物を出土、研究を大きく前進させた。いずれも低丘陵上の遺跡で、竹並・前田山遺跡では前～中期の集落・終末期～古墳時代初



第2図 周辺道跡分布図 (1/25,000)

- 1.石塚山古墳 2.豊塚古墳 3.御所山古墳 4.浄土院遺跡 5.鷺川遺跡 6.船光江白川小学校校庭遺跡 7.天役神社古墳群 8.山口道跡A地区 9.山口道跡B地区
10.山口南古墳群 11.大徳遺跡 12.谷遺跡 13.神後前方後円墳 14.法正寺木ノ坪遺跡 15.黒添メウト塚古墳 16.惣永丸山古墳 17.柿市廃寺

期の墳墓群、下稗田遺跡では各期にわたる集落と墓地为調査された。同様の立地をみせる遺跡に貯蔵穴を圍繞する環濠を有する刈田町葛川遺跡⁽¹¹⁾、貯蔵穴・住居跡からなる豊津町羽熊遺跡⁽¹²⁾・犀川町辻垣遺跡⁽¹³⁾・勝山町小長川遺跡⁽¹⁴⁾などがある。また、洪積（低）台地上の遺跡としては豊津町川の上・総社地区遺跡⁽¹⁵⁾、行橋市鬼熊遺跡⁽¹⁶⁾・犀川町大熊糸里遺跡⁽¹⁷⁾などがあり、やはり弥生前期～中期にいたる集落跡・墓地などが発見されている。低丘陵・微高地のいたるところに該期の遺跡が立地する。

後期前半の遺跡はまだあまり知られていないが、後半～古墳時代初頭前後の墓地の調査例が続き、銅鏡や鉄製品を副葬する例もかなり知られている。近年の発掘調査で確認されたものは先の行橋市前田山遺跡⁽¹⁸⁾・下稗田遺跡⁽¹⁹⁾、勝山町小長川遺跡⁽²⁰⁾、豊津町川の上遺跡⁽²¹⁾・平遺跡⁽²²⁾などで、いずれも報告書が刊行されている。

やはり後期後半を中心とする集落跡はこの白川地区でも濃密に発見・調査されている。それはこの地域の圃場整備事業がほぼすべて埋蔵文化財に対する協議を経てなされたことも幸いしている。法正寺木ノ坪遺跡⁽²³⁾では弥生中期から古墳中期にいたる100軒近い住居跡などが調査され、大量の土器の中に初期の須恵器が含まれる。谷遺跡⁽²⁴⁾では弥生前期～鎌倉期にいたる長期の住居跡・掘立柱建物跡などが検出され、弥生末～古墳時代初頭にかかる外来系土器や古代に属する唐三彩陶枕片・緑釉陶器などが注目される。また山口遺跡⁽²⁵⁾でも相似た内容の遺構群が調査されている。

古墳時代は県下でも前方後円墳が集中する地域の一つであり、かつ全期間を通じて大型墳が築造され、小規模墳が稠密に分布する。前期前方後円墳としては7面の三角縁神獸鏡を現存する刈田町石塚山古墳⁽²⁶⁾（墳長110m）が唯一で突出する。周辺部の調査では前期に遡る小型古墳も発見されているが、破壊が進んでいて内容がはっきりしない。石塚山古墳を含めたさらなる今後の調査が期待される。また、白川地区では天疫神社裏古墳群⁽²⁷⁾で小規模な方墳群が調査されている。副葬品は乏しいが、古式の土師器を出土した。同様な小規模方墳は近年調査例が増えている。

中期古墳では周濠を有する刈田町御所山古墳⁽²⁸⁾（同120m）が圧倒的な存在である。石障・屍障を有する初期の横穴式石室を主体部とするようだが、開口が古く細部は判然としない。行橋市稲童地区では周濠を有する墳長60mほどの石並古墳⁽²⁹⁾（帆立貝形）を盟主として小古墳が集中するが、中に舶載鏡や甲冑を副葬するものがあり、やはり有力な集団の墓所と目される。

後期前半代の代表的な古墳は全長50m前後に推定される前方後円墳の刈田町番塚古墳⁽³⁰⁾である。墳丘が失われたことは残念であるが、主体部が未掘であったために舶載鏡や甲冑・馬具などの豊富な副葬品を出土した。6世紀初めに比定される。前後して以降、内陸部に勝山長苅田丸山古墳⁽³¹⁾・扇八幡古墳⁽³²⁾、そして庄屋塚古墳⁽³³⁾、行橋市八雷神社古墳⁽³⁴⁾などの周濠を含めた全長100m前後の中規模前方後円墳が築造される。6世紀後半頃にはさらに小規模な前方後円墳が各水系ごとに営まれる様相となるが、盟主墳は先の勝山町・行橋市の古墳であろう。

前方後円墳が消滅する頃には大型の円・方墳が築かれる。勝山町に所在する綾塚（円墳）・橘塚（方墳）はともに直径（一辺）40mほどの大型墳で、国指定史跡である。また、豊津町に所在する46×36mの長方形墳丘に周濠・周堤を備えた甲塚方墳⁽³⁵⁾、直径29mの円形墳丘に二重の周濠を巡らした彦徳甲塚古墳⁽³⁶⁾（県指定史跡）も注目される。これらは前者が旧京郡、後者が旧仲津郡に属し、それぞれのこの時期の最大規模の古墳である。また、この地域は横穴墓が非常に発達し、竹並遺跡⁽³⁷⁾・前田山遺跡⁽³⁸⁾は研究史上に名を留める大規模なものであった。横穴墓・小古墳は山麓の随所に稠密に営まれる。

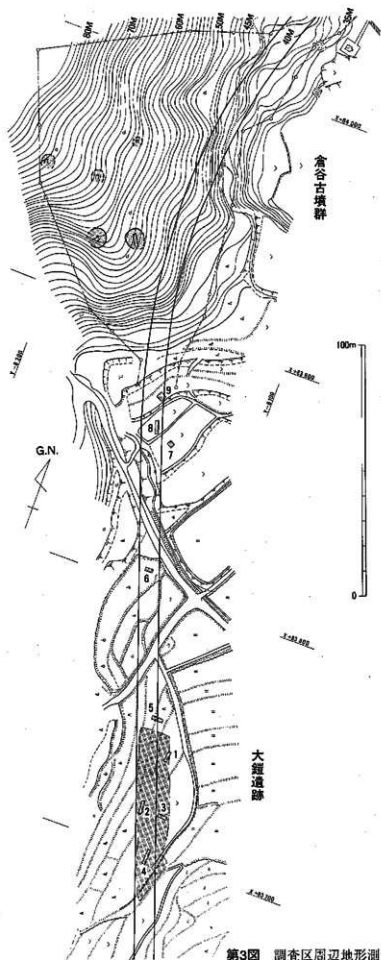
やがて古代寺院が建立されるが、旧京都郡では行橋市椿寺廃寺で四天王寺式伽藍配置がほぼ確認された。旧仲津郡域では犀川町木山廃寺・豊津町上坂廃寺・豊前国分寺などが知られるが、破壊が進行し、あるいは調査不十分で詳細は判然としない。瓦窯も同様であるが、近年調査された築上郡築城町に属する船迫瓦窯跡の調査では良好に遺存する国分寺瓦窯とともに7世代前半に遡る可能性をもつ窯跡を発見、注目されている。勝山町内には奈良末～平安初期に創建されたという菩提廃寺が所在し、塔跡が県指定史跡になっているが、他の堂宇の詳細は未調査である。

豊前国府については所在地論争が続いてきたが、近年の調査では豊津町国作地区に確定され、すでに史跡公園化している。しかし、遺構の状況などからまだなお一部に移転説がいわれている。

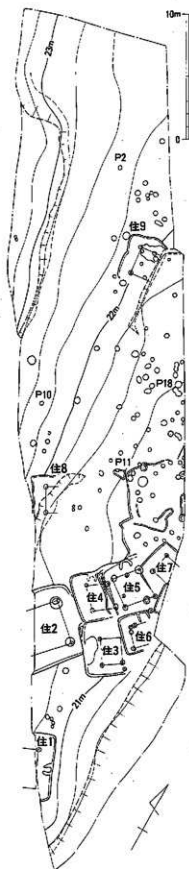
以上、簡単に見てきたように、この地域は特に古墳時代以降、旧「豊前国」の中の一勢力を有しており、国府が設置される下地となっている。同様に古墳時代前半期・古代に隆盛をみせる宇佐地域との比較検討は興味深い問題である。

註

- 1 浄土院遺跡調査「浄土院遺跡調査概要」、1972
- 2 豊津町教育委員会「豊前国府および跡九西遺跡」(『豊津町文化財調査報告書』第9集、1990)
- 3 平成3年度、開場整備事業に伴い行橋市教育委員会が調査、整理中。
- 4 苅田町教育委員会「富久遺跡Ⅱ地区」(『苅田町文化財調査報告書』第17集、1992)
- 5 福岡県教育委員会「豊上ノ上遺跡」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(『一般国道10号線松田道路関係埋蔵文化財調査報告』第4・7・9集、1995・96・97)
- 6 定村賢二・小田高十郎「福岡県長井遺跡の弥生土葬」(『九州考古学』25・26号、1965)
- 7 福岡県教育委員会「辻田ササマル遺跡」(『一般国道10号線松田道路関係埋蔵文化財調査報告』第1集、1993)
福岡県教育委員会「辻田島原・長途遺跡」(『一般国道10号線松田道路関係埋蔵文化財調査報告』第2集、1994)
- 8 竹造遺跡調査会「竹造遺跡」、1979
- 9 行橋市教育委員会「前田山遺跡」(『行橋市文化財調査報告書』第19集、1987)
- 10 行橋市教育委員会「下神山遺跡」(『行橋市文化財調査報告書』第17集、1985)
- 11 苅田町教育委員会「葛川遺跡」(『苅田町文化財調査報告書』第3集、1986)
- 12 平成6年度、国道496号線改良工事に伴い福岡県教育委員会が調査、整理中。
- 13 平成4・5年度、県道改良工事に伴い福岡県教育委員会および早川町教育委員会が調査、整理中。
- 14 勝山町教育委員会「小長川遺跡」(『勝山町文化財調査報告書』第6集、1993)
- 15 豊津町教育委員会「豊前国府および正遺跡」(『豊津町文化財調査報告書』第8集、1989)
- 16 平成7年度、県営酒場整備事業に伴い苅田町教育委員会が調査、整理中。
- 17 児玉真一「福岡県京都府豊津町十道跡発見の稲式石棺墓群跡品」(『九州考古学』第35号、1980)
- 18 苅田町教育委員会「黒漆・法正寺地区遺跡群」(『苅田町文化財調査報告書』第6集、1987)
- 19 苅田町教育委員会「谷造跡調査報告書」(『苅田町文化財調査報告書』第11集、1990)
苅田町教育委員会「谷造跡Ⅰ-D地区」(『苅田町文化財調査報告書』第19集、1993)
- 20 苅田町教育委員会「山山遺跡」(『苅田町文化財調査報告書』第21集、1993)
- 21 苅田町教育委員会「心塚山古墳群調査概報」(『苅田町文化財調査報告書』第9集、1988)
- 22 苅田町教育委員会「天塚神社古墳群」(『苅田町文化財調査報告書』第10集、1988)
- 23 苅田町教育委員会「史跡跡所山古墳群管理計画策定報告書」、1976
- 24 縄内古文化研究所「福岡県行橋市稲堂古墳群第1次、第2次調査抄録」、1964・65
- 25 苅田町教育委員会・九州大学文学部考古学研究室「豊前古墳」(『苅田町文化財調査報告書』第20集、1993)
- 26 行橋市教育委員会「八雲古墳」(『行橋市文化財調査報告書』第14集、1984)
- 27 豊津町教育委員会「中坂方墳」(『豊津町文化財調査報告書』第13集、1994)
- 28 行橋市教育委員会「椿寺廃寺」(『行橋市文化財調査報告書』第24集、1996)
- 29 早川町教育委員会「木山廃寺」(『早川町文化財調査報告書』第1集、1975)
- 30 西井仁夫・高橋孝「豊前地方の8世紀代の軒瓦について」(『九州考古学』第59号、1984)
- 31 豊津町教育委員会「史跡豊前国分寺跡」(『豊津町文化財調査報告書』第16集、1995)
- 32 高橋孝教育委員会「船迫瓦窯跡」(『築城町文化財調査報告書』第4集、1997)
- 33 勝山町教育委員会「菩提遺跡」(『勝山町文化財調査報告書』第2集、1987)
- 34 豊津町教育委員会「豊前国府」(『豊津町文化財調査報告書』第3・10集、1985・93)



第3図 調査区周辺地形測量図
(1/1,500)



第4図 大鐘遺跡遺構配置図
(1/300)

Ⅲ. 調査の内容

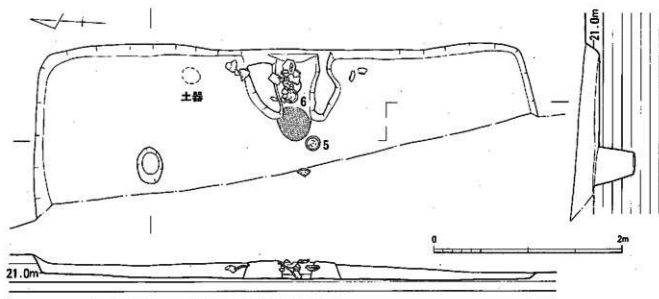
白川地区は北および東西を平尾台に連なる標高400～600mの山系で塞がれ、南は低丘陵が複雑に派生し、その間に小波瀬川が西流する盆地状の地形にある。ここに報告する2遺跡はその盆地の北西部の山麓に位置するものである。背後の山には天平6年に創建され、14世紀後半には300坊を数えたといわれる修験道の不知山等覺寺（現白山多賀神社）が位置する。関連する文化財として青龍窟（奥の院）は国指定天然記念物、白山多賀神社出土銅製経筒は県指定考古資料、同社の春祭「松会」は県指定無形民俗文化財であったが、この度国指定となった。

1. 大鎧遺跡の調査

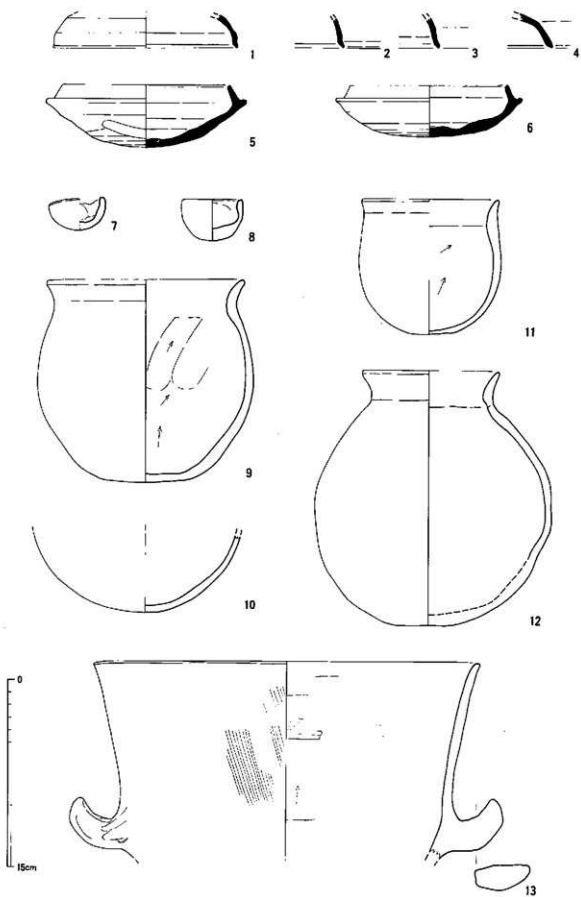
試掘調査では9本のトレンチを設定した（第3図）。対象地北半には浅い谷が入っていて、その部分では遺構を確認できず、本調査から除外した。また、北端の山麓に開けた9トレンチでは遺構を確認できなかったが、中世以降の比較的良好な遺物を採集した。本調査時に表土掘削したものの、厚い砂層（地山パイラン土の二次堆積層）に覆われた青灰色土層が現れたために発掘調査を実施していない。試掘時の出土遺物は本報告に掲載している（第24図）。

本調査は試掘対象地南半の丘陵が張り出した部分で実施した。その中でも北側は削平のためか遺構の分布が希薄で、南側に集中していた。特に南端付近では、当初包含層と判断して唐剣で発掘を開始したが、その途次でカマドや焼上を確認して密集した竪穴式住居跡群と判明した部分がある。したがってそこについては充分な把握ができていない。

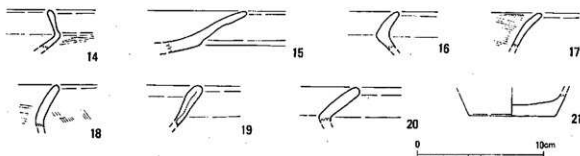
1) 遺構と遺物



第5図 1号竪穴式住居跡実測図 (1/40)



第6圖 1号竖穴式住居跡出土遺物実測図1 (1/3)



第7図 1号竪穴式住居跡出土遺物実測図2 (1/3)

1号竪穴式住居跡 (図版3、第5図)

調査地最南端に位置し、大部分が調査区外へ広がる。確認できる規模は南北長5.3m、残存する深さは最大で約0.25mほどとなる。

屋内施設としてはカマドを東辺に接する位置で、そして主柱穴の1本を検出した。カマドの袖は黄色・黒色のブロックを含む茶褐色土で構築され、内部にやや扁平な花崗岩を用いた支脚が傾いて残存していた。カマドが東辺に設置されることはとても珍しい。

出土遺物 (図版10、第6・7図)

カマド内で須恵器杯や手捏のミニチュア・土師器甕(1・7・11)が、その周辺で他の須恵器杯身や土師器甕などが出土した。

1～6は須恵器。1は天井部を欠けが、ほぼ1/3が残存する。天井・口縁部界は甘い稜線となり、口端部に面をもつ。2～4はいずれも小片。やはり口端面をもつ。5は1/4が残存、6は完存する。いずれも口端部に内傾する平坦な面をもつが、法量は前者が口径・器高ともに大きい。

7以下は土師器、一部が弥生土器である。7は完存する、8は1/4弱が残存する手捏のミニチュア。9は底部が平底状を呈する。全体に二次的な火熱を受けていて、外面は赤変し、内面では体部中位付近以下は灰白色、以上は焦げ付いた痕跡が黒褐色を呈する。10は丸底の底部。11は口縁部の反転が弱い小型の甕で、これもよく使用されている。底部から上方へ順に灰白色、黒色、灰黄褐色に変色する。12は造りが雑でいびつな土器。これも内面は灰白色となり、外底面が赤く変色する。13は直口縁をもつ甕で、焼きが甘く、全体に灰黄色を呈する。

14は須恵器を模した土師器杯身で、黄褐色～灰黄褐色を呈する丁寧に造られた土器。15は高杯小片で、内面が灰白色、外面は灰赤褐色となる。本遺跡で出土した該期の高杯は意識的に赤く焼き上げられたようである。

16～20は小片。20は弥生後期(終末期)に属するものであろう。21は弥生中期の甕底部片で、これもよく焼ける。

2号竪穴式住居跡 (図版4・5、第8図)

試掘トレンチで確認した住居跡で、1号住居跡の北に近接する。西辺が調査区外へのび、東辺は2基の住居跡と重複する。切合関係は判別し難かったが、2号住居跡が先行するようである。

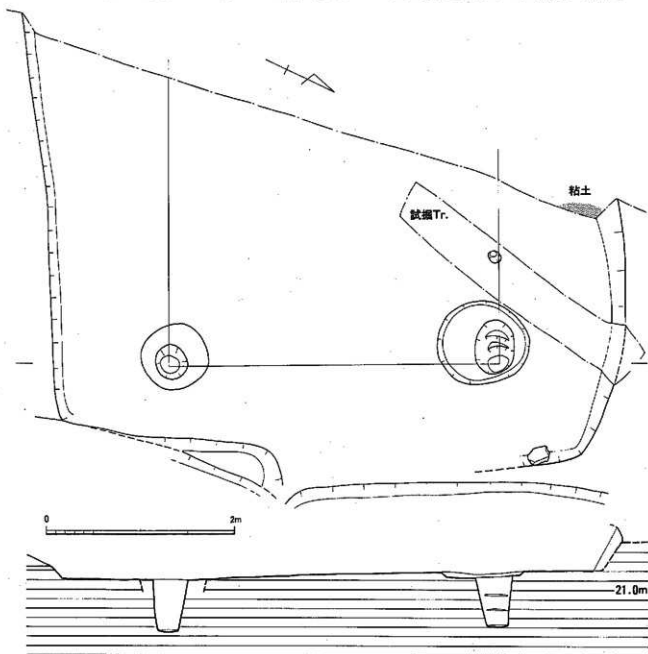
規模は南北長6m強、東西長は6m弱まで確認できる。深さは最大で0.4mほどを測る。内部構造としては支柱穴の2基のほか、北辺の調査区端でカマドの袖に使用された粘土を検出している。

出土遺物（図版10・11、第9～11図）

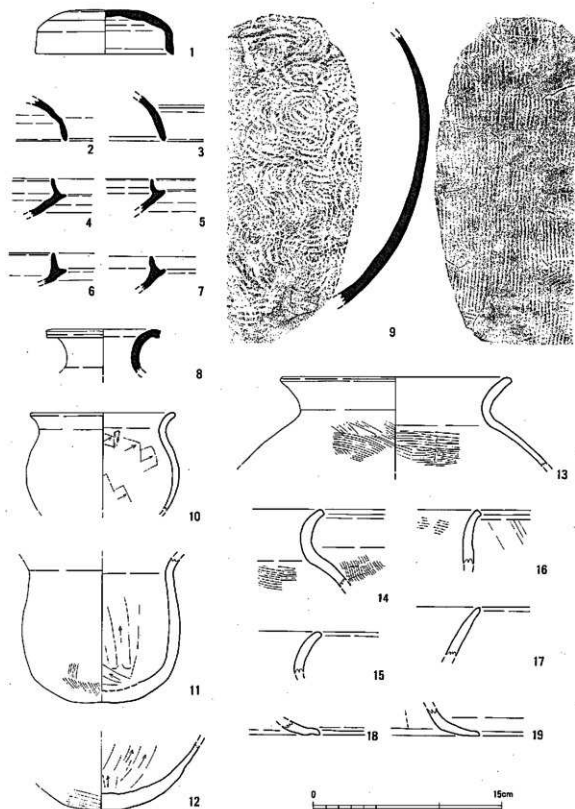
試掘時の4トレンチで土器（1・11・12）を出土したが、その時のメモには床面付近で集中出土したと記録しており、この住居跡に伴うものとして扱う。

1～9は須恵器。ほかは土師器あるいは弥生土器である。

1は唯一全体が窺える資料で、ほぼ1/2が残存する。口端部に内傾する平坦な面を残し、天井部は丁寧に回転斲削りを施している。ほかの小片の蓋杯に比べれば法量の点でも、器形の点でもやや特異なもので、杯身とはセットにならないものであろう。2は天井・口縁部界を後縁で、3は同所を甘い凹線状の窪みで表現する小片。2の口端部は丸く、3では小さな面をなす。4～7は杯身の小片。8



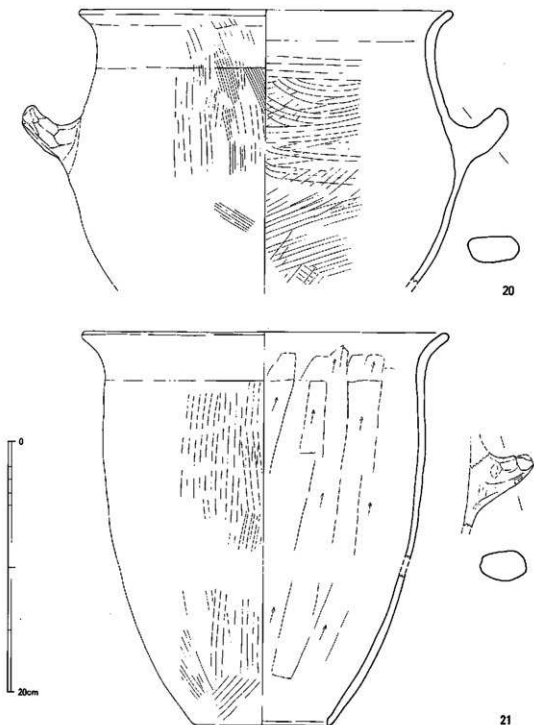
第8図 2号竪穴式住居跡実測図（1/40）



第9图 2号竖穴式住居跡出土遺物実測図1 (1/3)

は小型壺の口縁部で、口端部を断面方形に成形、小さく垂下させる。造作・焼成ともに非常に良好である。9は甕の体部片。外面は平行叩きを施した後で横撫でをおそらく螺旋状に施す。

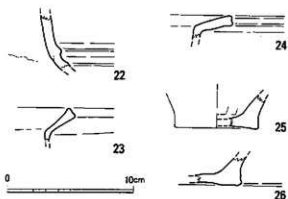
10は二次的火熱のため、全体に黒色化し、外面の多くが剥離している。11もよく焼け、これは赤変する。12は底部にも刷毛目を施して丸くする。13は試掘時に検出したものだが、ほぼ1/2が残存することからみてもこの住居跡に伴うものであろう。灰黄色を呈し、強い火熱を受けた形跡はない。14～17は甕あるいは瓶の口縁部小片。この遺跡で出土した甕は黄白色～灰黄色の焼きの甘いものが



第10図 2号竪穴式住居跡出土遺物実測図2 (1/3)

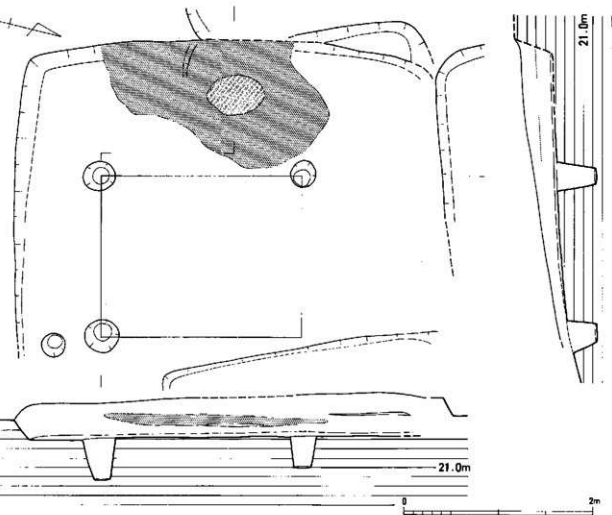
多いが、16のそれは通常のものである。15・17は器表が非常に荒れる。18・19は高杯脚部で、端部を小さく下方につまみ、端面をもつ。いずれも赤味が強く発色する。

20・21は上師器。20は図示部の1/3ほどが残存。成形が雑で、頸部内面には無数の焼け弾け(?)が見られる。体部の調整は内外ともに間隔の広い、シャープな刷毛目が施される。全体に黄白色～灰黄色を呈し、黒斑が残る。21は体部上下と取っ手が接合し得ないが、全体がほぼ窺えるもので、張



第11図 2号竪穴式住居跡出土遺物実測図3 (1/3)

りの弱い砲弾形の体部となる。底部はほぼ1/2が残存し、その径は約10cmほどとなる。全体に丁寧に造られた瓶で、刷毛目はやはり疎だがこれは浅い。明黄褐色を呈する。



第12図 3号竪穴式住居跡実測図 (1/40)

3号竪穴式住居跡 (図版4・5、第12図)

2号住居跡の南東を切って位置する。これも東辺が6号住居跡に、北辺が4号住居跡に切られるように正確な平面プランを把握できていないが、確認した3本の主柱穴の配置から見て南北長4m、東西長5mほどと推測される。深さは最大で0.4mほどが残る。

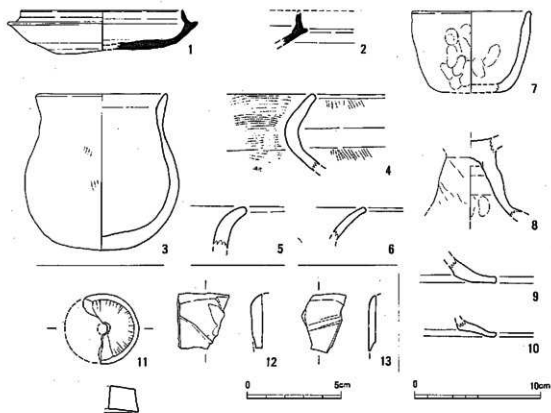
明確な形でのカマドを把握できなかったが、西辺中央付近に2.4×1.3mの範囲で不整形な粘土の広がりを出した。粘土の厚さは2~3cmほどであった。この部分は、広範に広がる包含層の性格を確認するためにあけたトレンチにかかったことが災いしたが、粘土の広がり中央付近に火床の赤色硬化面も確認している。この粘土の広がる状況はカマドの自然崩壊によるものとは考え難く、意図的な行為を窺わせる。なお、遺構実測図で床面と粘土層の間が空いているのは張床が施されていたものであろう。

出土遺物 (図版11、第13図)

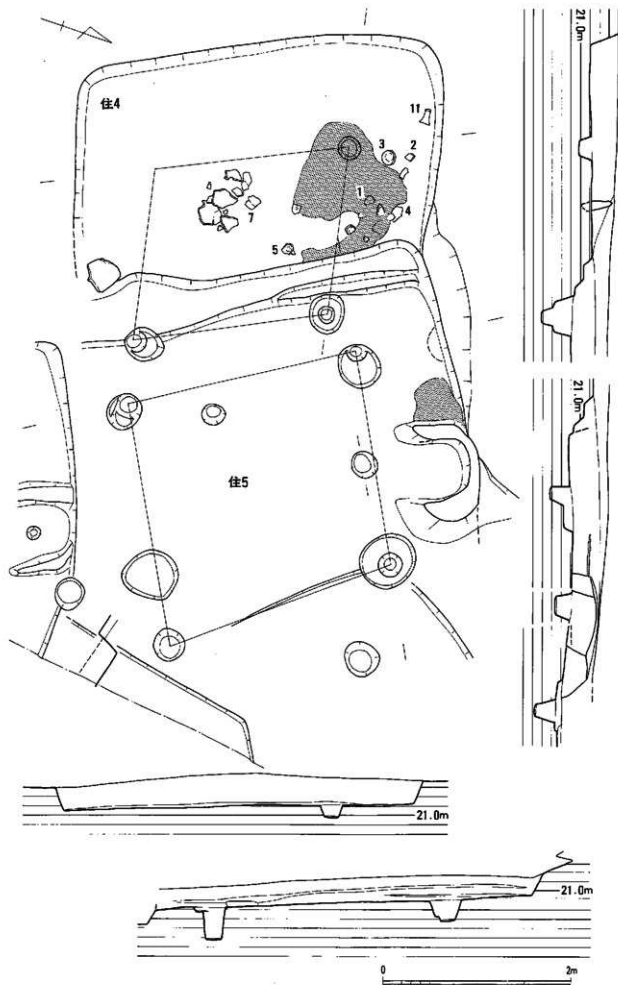
カマドの痕跡と考えている粘土の広がり北側床面直上で土師器甕(3)を確認したが、他は出土位置を特定できていない。

1・2は須恵器。1は底部がほぼ完存。口縁部付近は1/3が残存する。焼け歪んでいるが、概ね口径21.9cm、器高3.5cmを測る。立ち上がりの中程で屈曲する感がある。外底面の回転施割り丁字である。2は同杯身の小片。口端部を欠く。

3~10は土師器。3は口縁部の開きの小さな、下膨れとなる小型の甕で、非常によく焼けている。外面底部付近は黄白色、以上は灰黒色~灰赤色へと変色している。内面は一部で底部付近におよぶ



第13図 3号竪穴式住居跡出土遺物実測図 (1/3、1/2)



第14図 4・5号竪穴式住居跡実測図 (1/40)

が、大部分では頸部付近以上が灰黒色、以下が明黄褐色。体部内面は荒れてボロボロとなる。4～6は小片。

7は弥生終末～古墳時代初頭頃に属するものであろう。7は平底の鉢で、基本的に手捏であるが丁寧な造りである。4号住居跡出土例に似た器形の取っ手付鉢があり、これにも取っ手が付いていた可能性がある。9・10は高杯脚部の小片。器肉の厚さが異なるが、脚端部に面を有し、内面に鋭い稜をもつなど共通する。

11は蛇紋岩製の紡錘車で、1/2強が残存する。最大径3.8cm、厚さ1.2cmを測る。上面外周に放射状の不規則な沈線が見える。11・12は粘板岩製の残片。積極的に使用痕といえるものは乏しいが、比較的平滑な面をなすことから何らかの用途で用いられたものと思われる。

4号竪穴式住居跡（図版4・6、第14図）

2・3号住居跡を切り、5号住居跡に切られるようである。平面形は平行四辺形に近く歪んだものとなり、また、3基が確認できた主柱穴と思われる柱穴も同様な配置をとる。南北長は4m弱で、先の平行四辺形に近く並ぶ主柱穴が認められるならば東西長は4m強に復元できる。深さは最大で0.3mほどである。

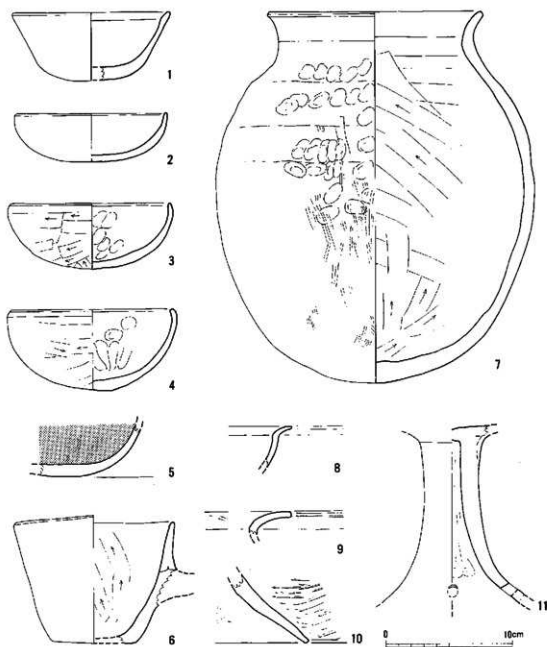
これも北辺で原形をとどめないカマドの残骸を検出した。土器片を覆う不整形な粘土の広がりがあり、その中に河原石を用いた支脚が立っている。サブトレンチで西袖の一部が確認できたが、火床は見えない。

出土遺物（図版12、第15図）

主としてカマド周辺で土器を出土した。いずれも土師器である。

1～5は浅鉢形の器形となるものだが、1のみは丸味が乏しい。口端部が小さく外折し、肉厚となる。全体に器表が荒れており、剥離が著しい。2は浅い碗形。とても丁寧な造作がなされ、二次的に火熱を受けて口縁部内外のみが黒色化し、それ以外は明赤褐色となる。3は球形体部をもつ碗で、口端部を小さく巻き込む。体部外面は灰褐色～灰黒色、口縁部付近内外面が灰赤色、体部内面が上位から灰黒色、黄褐色と変色する。造りは丁寧なものである。4はさらに深く球形となるもので、口端部はやはり巻き込んでいる。これも丁寧に造られたもの。5は残片であるが、内外面を黒色に焼成した研磨土器で、器表は全面が灰黒色、器肉は灰色を呈する。内面に乱雑な、しかし繊細な暗文が密に施文されるが、見込みに特殊な施文はない。6は取っ手が剥離する。コップ形の器形を呈し、口縁部が波打つなど雑な成形であるが仕上げは丁寧である。7はほぼ完存する甕で、雑なものである。

8～11は弥生末～古墳時代初頭に属するものである。8は小型の甕あるいは鉢で、口縁部が浅く大きく開いて、口端部が小さく匙面となる。造りは丁寧。9は大きく浅く開く甕で、端部が面をなす。10は外面に粗い平行叩きを残す器台。11は長脚の高杯で、図示部はほぼ完存する。円孔の一端が残存する。



第15図 4号竪穴式住居跡出土遺物実測図 (1/3)

5号竪穴式住居跡 (図版4・6、第14図)

4・6・7号住居跡と重複するもので、先後関係は4号住居跡に後出し、6・7号住居跡に先行するようである。2辺を検出したのみであるが、想定した主柱穴—これも深さなどが必ずしも一致しないが—を基準に復原すれば、南北長約2.4m、東西長4m弱の規模となる。深さは最大で0.3mほど。

これも北辺でカマドを検出した。黄褐色粘土を主体として構築したもので、袖の形状は原形をとどめるが、支脚および火床は認められなかった。

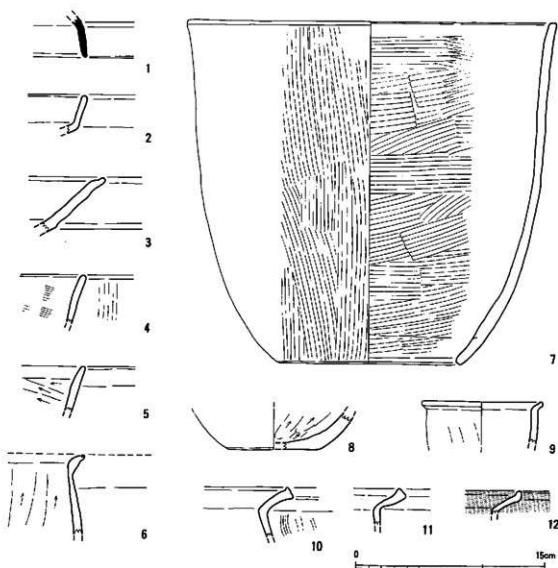
出土遺物 (図版12、第16図)

埴土中から出土したもので、個別の出土状態は確認していない。

1は須恵器杯蓋小片。天井・口縁部界は甘い窪みで画され、口端部は丸くおさめられる。

2以下は土師器。2は須恵器模倣の土師器杯身小片。全体に灰赤色を呈する丁寧な造りの土器である。3は高杯で、口端部を匙面状にする。稜は比較的明瞭で、これも赤く焼造される。4・5は直口縁の小片で甗であろう。6は口縁部が小さな甗で、P-24とする主柱穴中から出土した小片。7は口縁部のはば1/4、底部の1/2が残存する甗であるが、取っ手部分は残らない。口縁部は小さく外反するがほぼ直行し、全面に粗い刷毛目が見える。部分的に火熱を受けて赤変するが、隣り合う破片でまったく変色が見られないものもあり、破損後に焼けたことが判る。8はよく焼けてボロボロとなった底部小片。

9は口縁部が小さく外反する小型の甗で、丁寧に造られた土器である。弥生終末～古墳時代初頭に属するものであろう。10～12は跳ね上げ口縁の甗。12は残存部全面に赤色顔料の痕跡が残る。



第16図 5号竪穴式住居跡出土遺物実測図 (1/3)

6号竪穴式住居跡（図版4・7、第17図）

3号住居跡の東、5号住居跡の南に位置する。東辺は調査区外へ続くために全体は未確認であるが、ほぼ復原できる。

平面的には南北長3.1m、東西長はカマドを中心と仮定すれば4mほどとなる。深さは最大で0.2mが残る。主柱穴は2本を検出したのみで、その主軸は壁体に対してやや斜位となる。

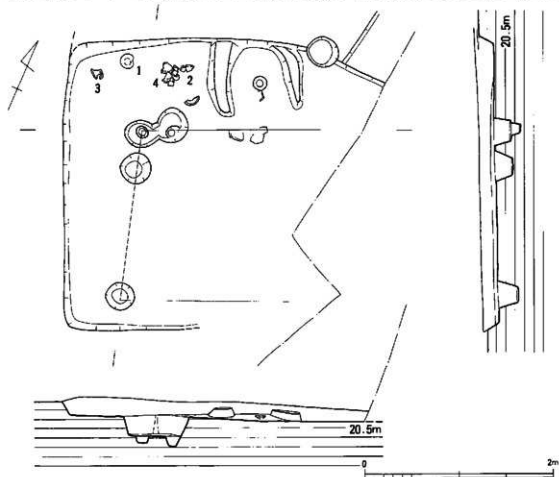
北辺で検出したカマドは袖に黄褐色粘土を主として用い、高さ10cm弱が残存していた。支脚は抜き取り穴を検出したのみである。

出土遺物（図版13、第18図）

図示したような状態で北辺に沿っていくつかの土器が出土した。

1～3は須恵器。1は口端部を丸くおさめ、天井・口縁部界を稜線で画する。2は口端部を断面方形に近く仕上げている。両者は胎土や造りの雑さに共通点があり、本来的にセット関係であるとしてよからう。3は造り・胎土ともに精巧な高杯片で、約1/3が残存する。長脚2段透孔で、透孔は3方向に穿たれるようである。透孔の間には2条の凹線を刻む。

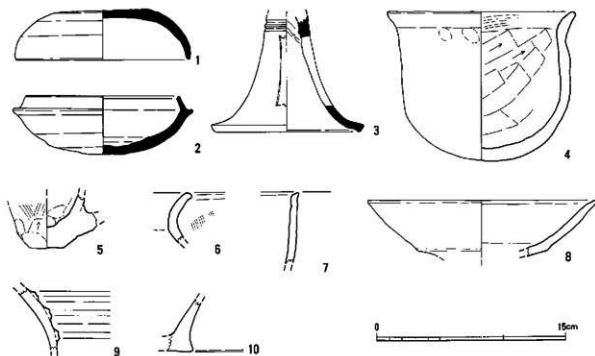
4～8は土師器。4は寸胴の体部をもつ甕で、外底面は二次的な火熱で赤変する。内面は体部上半以上が灰黒色、以下が灰黄色となる。口縁部が波打つなど、雑な造りである。5は口縁部と先端を欠く取っ手付のミニチュア。体部下半および外底面を匏削りで面取り風に処理する。6は緩く外彎



第17図 6号竪穴式住居跡実測図（1/40）

し、黄白色を呈する。体部内面は荒れが甚だしい。7は直口縁の土器片で、これも二次的な火熱を受けて器表が荒れる。8はやはり赤く焼かれた高杯片で、口端部がつまみ出され、稜も比較的シャープである。焼け歪みが見られる。

9は多条のM字突帯を付す弥生土器。10は焼けて変色する弥生土器の底部片。



第18図 6号竪穴式住居跡出土遺物実測図 (1/3)

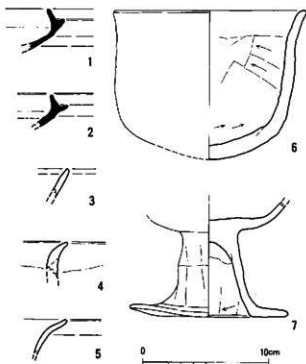
7号竪穴式住居跡 (図版4、第20図)

5号住居跡の東にあって切合関係を有するが、5号住居跡を完掘して後に気付いたこともあって現地では先後関係を把握できていない。また、ほぼ1/2が調査区外へび、遺存状況もよくない。

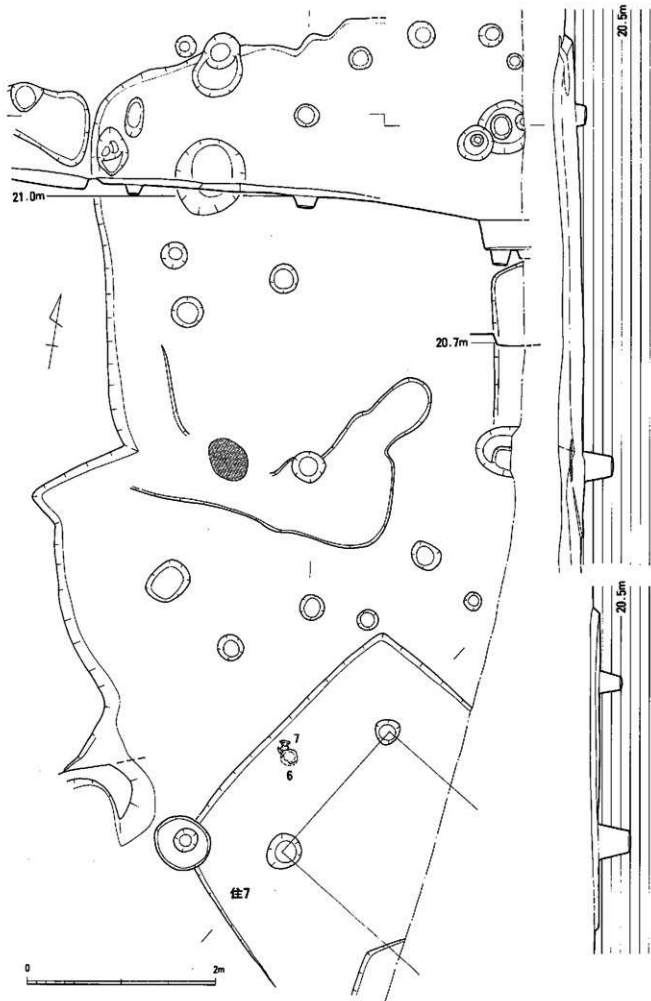
確認できる南北長は約3m強であり、深さは最大で0.1mに満たない。ほかの多くの住居跡が北辺にカマドを付すことを考えれば、本住居跡もそこにカマドが位置していたのかも知れないが、ここでは火床などの痕跡を認められなかった。

出土遺物 (図版13、第19図)

カマドがあるべき位置で図のような状態



第19図 7号竪穴式住居跡出土遺物実測図 (1/3)



第20図 7号竪穴式住居跡および周辺部実測図 (1/40)

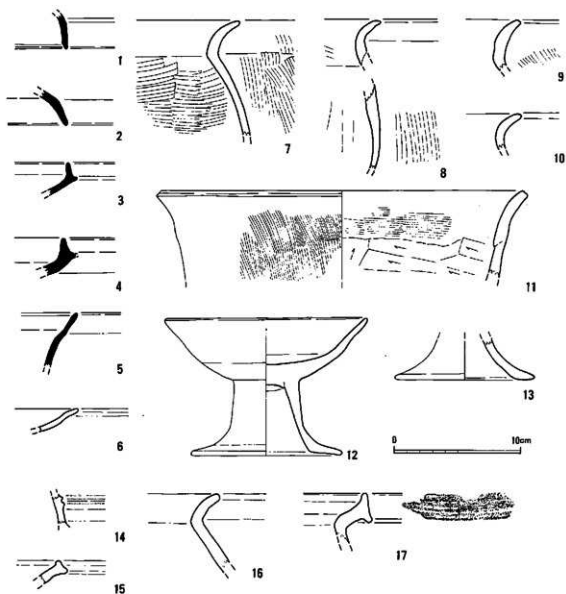
の土器を出土している。

1・2は須恵器小片。1はとても丁寧に造られている。

3～7は土師器。3は口端部を小さくつまむ碗のような小型品であろう。4は継ぎ目の残る小片で、器表が荒れる。5は弥生終末前後のものと思われる。これも器表が荒れるが、口端部を断面方形に成形したことが判る。6は口縁部の反転が小さい寸胴の小型甕で、肉厚だが器形は整ったものとなる。これもよく焼けていて外面は赤変し、内底面は灰黒色、器表はボロボロとなる。7は赤く焼かれた高杯で、杯部内底面では焼成時の弾けが甚だしい。脚部の形態は他例同様、脚端部が面をもち、脚裾から柱状部へ移行する部分に鋭い稜を有する。

5～7号住居跡出土遺物（図版13、第21図）

先述したようにこの付近は遺構の重複が甚だしく、当初は包含層として発掘していた。帰属する遺構が判然としないが、その際に出土した遺物をここにまとめる。



第21図 5～7号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/3）

1～5は須恵器、または土師器・弥生土器である。1は口端部に匙面を有し、天井・口縁部界を窪ませる。2は口端部を丸くおさめ、天井・口縁部界を稜線で表現するものである。3は胎土の粗い、4は非常に器肉の厚い杯身である。5は腿であろうか。器肉が薄く一様であり、残存部中位で緩く屈曲する。口端部内側に面を有する。施文は見えない。

6～13は土師器。6は浅い皿状の小片で、口端部を小さく外折させる。非常によく焼けていて器表が荒れる。これは弥生終末前後の土器であろうか。7～10は口縁部がC字形に外彎する甕で、8はP-35とした柱穴から出土したもの。9は口端部に面をもつ。11は口端部が匙面となり、内面に粘土紐の縋ぎ目が見え、それ以上を刷毛目、以下を篋削りで調整する。12の高杯はほぼ1/2が残る。杯部口縁端は内側に沈線状の小さな窪みを付して匙面に変えるようである。稜線は非常に甘く、認めるに困難なほどである。脚部の形態は裾内面が鋭く屈曲する点是他例と似るが、端部は丸くおさめられている。調整は全体に丁寧である。13は裾の屈曲も形骸化したものといえる。

14はシャープな突帯を付した弥生土器で、外面に赤色顔料が見える。15は極度に発達した跳ね上げ口縁。16は弥生終末前後に属するものであろう。器表が荒れる。17は口端部を上下に肥厚させて、外面に掘凹線を刻む中部瀬戸内の影響を受けた土器であるが、胎土・焼成等に特段の違いはなく、在地で造られたものと思われる。

8号竪穴式住居跡（図版8、第23図）

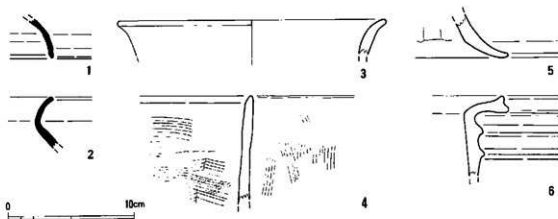
2号住居跡の北で単独に位置するが、大部分が削平されていて遺存状況はよくない。検出した2基の柱穴を主柱穴とし、かつそれらが住居跡の中央部に配置されていると仮定した場合の規模は一辺長4mとなる。深さは最大で0.3mほどが残存する。なお、カマドの痕跡は見られない。

出土遺物（第22図）

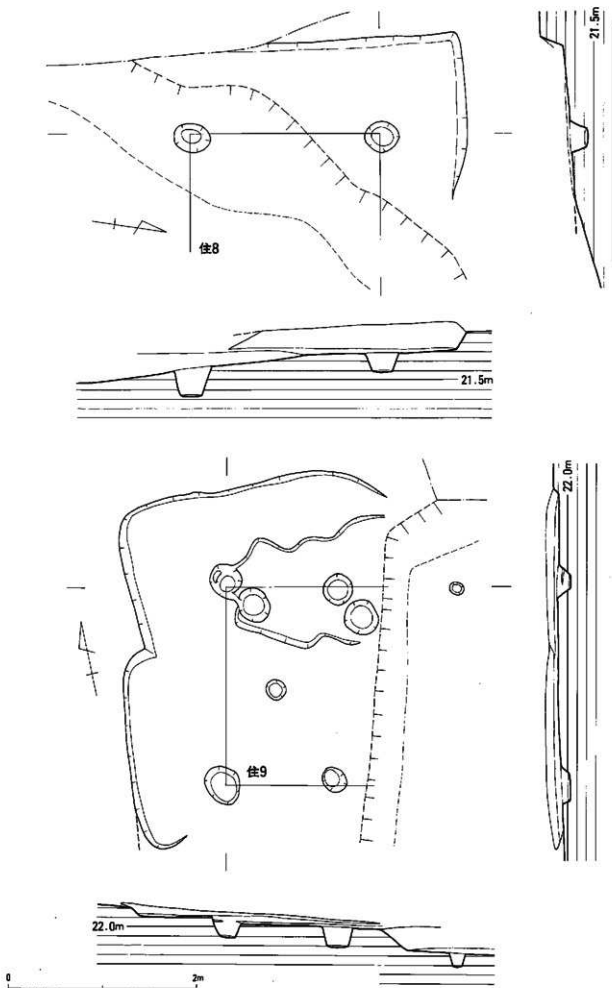
1・2は須恵器。1は口端部に面をもち、天井・口縁部界の稜もかなりシャープとなる。2は小型甕の口縁部で、器壁が非常に薄い。丁寧な土器である。

3は口縁部が緩く開く、4は直口縁のいずれも甕であろう。4の口端部は内外面に面取りが施される。5は高杯片で、これは脚端部に面を有さない。また、脚内面の稜線も直線的な精美なものとはならないようである。

6は若しく口縁部が誇張された弥生土器片。灰白色を呈する。



第22図 8号竪穴式住居跡出土遺物実測図（1/3）



第23図 8・9号竪穴式住居跡実測図 (1/40)

9号竪穴式住居跡（図版8、第23図）

調査区内で最も北に位置する住居跡で、これも遺存状況はよくない。また、これはカマドを確認できなかったことや主柱穴が不揃いな点、そして平面プランが不整であることなど、住居跡とするにはいささか疑問な部分もあるが、本遺跡では住居跡以外には顕著な遺構を検出していないので一応住居跡としておく。

平面規模はこれも一辺長4mほどの方形プランを想定できるが、深さは最大で0.1mほどが残存するに過ぎない。なお、削平された部分にある柱穴を主柱穴とするには深さが随分と異なっていて、無関係のものとしたほうがよいものと思われる。これもカマドの痕跡は認められない。すでに削平されたものであろう。

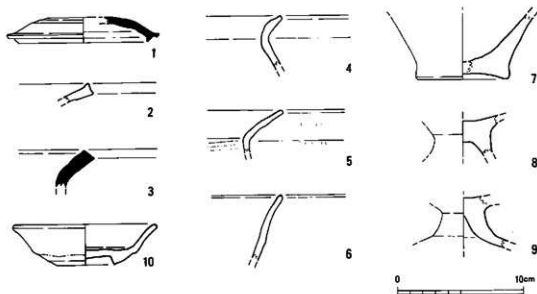
特徴を窺える出土遺物はない。

その他の遺構と出土遺物

主として遺構から出土した実測に堪える資料および試掘時に採集した中世期の遺物を紹介する。

土器（図版14、第24図）

1はP-11出土の須恵器で、ほぼ1/4が残存する。かえりを有する蓋で、口径は12cmに復原できる。天井部は回転斫削りで仕上げ、端部に面をもつ。つまみを有するものであろう。2は同じ柱穴出土の弥生土器小片。3は器肉が灰白色を呈する生焼け品で、端部が断面方形となる。あるいは脚部かも知れない。表採品。4はP-2から出土した土師器で、非常によく焼けて器表が荒れる。5は表採したもので、器肉が薄く、口端部に面をもつ。内外面に刷毛目の痕跡が見える。6・7はP-18とした不整形土坑出土。6は鉢あるいは碗であらう。非常に丁寧に造られた土器で、器表が焼ける。7は弥生土器。8はP-26出土。杯部底は灰黄色、外面は灰赤褐色を呈し、外面には絞り痕が見える。9は表採した小型高杯で、図示した部分はほぼ完存する。



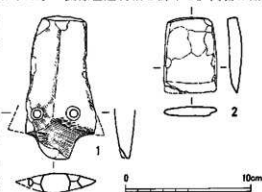
第24図 その他の出土遺物実測図1（1/3）

輸入磁器 (図版14、第24図)

試掘時に倉谷古墳群の位置する丘陵裾に入れた9トレンチから出土した、ほぼ3/4が残存する龍泉窯系青磁皿。口縁部は外壁し、体部外面から見込みにかけて厚い淡緑色透明釉を掛ける。高台は断面三角形を呈するいわゆる基筋底で、露胎黄白色となる。見込みに文様はないが、貫入が目立つ。14世紀後半に属するものである。

石製品 (図版9・14、第25図)

1は砂岩製の石戈。刃部はほとんどが潰れていて、切先・関も先端を欠く。身の鑄は甘く、また、関への移行は滑らかとなる。2は緑泥変岩製の扁平片刃石斧。長側片の一方は丸くなり、他方は角張る。刃部の一部を欠く他はほぼ完存し、長さ6cm、幅4.2cm、厚さ1cmの大きさである。



第25図 その他の出土遺物実測図2 (1/3)

2) 小 結

今回の調査では確実に9軒の住居跡を調査し、そしておそらくはさらに数件の住居跡が存在したと思われる。遺構出土の須恵器壺杯の中、明らかに身と蓋が逆転するものはP-11出土例のみであり、ほかにはほぼ小田富士雄氏のⅢ-B～Ⅳ-A期、およそ6世紀末～7世紀前半頃に相当するものである。多くが切合関係にあるとはいえ、その存続期間は短かったようである。

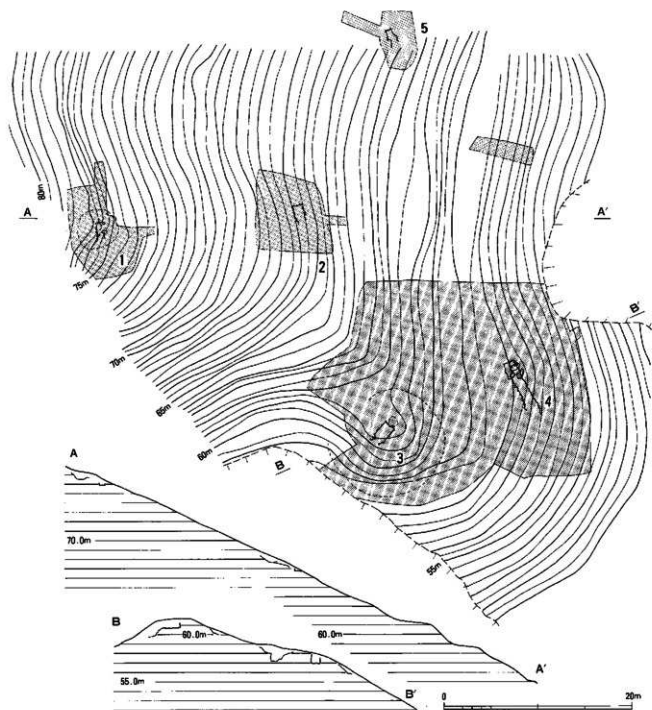
地形的に見れば、主要な遺構は舌上に張り出した小規模な低丘陵上にあり、かつ、調査区はすぐ後ろに丘陵が迫っているため、集落の中心は当然として東南に求められる。その集落の主要部が想定される地区はすでに圃場整備事業が施工されているが、その際に発掘調査がなされておらず集落の広がりや存続時期は判らない。

狭小な調査面積も災いして、今回の調査では特徴的な出土遺物が見られなかった。言を換えれば、ごく普通の農耕集落であったということであろうか。背後の山塊に無数に残る大小の後期古墳とその集落の様相の解明は今後に期するところが大きい。

一方、古墳時代集落に混入した形で弥生中期～終末の土器群が出土している。確実な遺構を把握できていないが、周辺の調査成果から背後の丘陵を含めた卑近な位置に該期の集落あるいは墓地が存在するのは間違いない。また、5～7号住居跡出土遺物(第21図17)のように瀬戸内的な特徴をもつ土器は、谷遺跡や法正寺木の坪遺跡でも出土しており、該期のこの地域が決して閉鎖的な位置にあったものではないことを如実に示している。

註

- 1 九州歴史資料館調査課長 横田賢次郎氏のご教示による。
- 2 青田町教育委員会「谷遺跡調査報告書」(『青田町文化財調査報告書』第11集、1990)
- 3 青田町教育委員会「黒浜・法正寺地区遺跡群」(『青田町文化財調査報告書』第6集、1987)



第26図 倉谷古墳群現況地形測量図 (1/400)

2. 倉谷古墳群の調査

調査対象地は非常な急斜面で、起伏の乏しい尾根線が2本ある。南の尾根線上に1～4号墳が立地し、北の尾根線上に5号墳が占地する。これらのうち、1・3・4号墳は発掘調査以前にそれと判明していたが、2・5号墳は両尾根線の微妙な傾斜変換点を見て、確認のためのトレンチを開けて発見したものである。なお、5号墳の下位にもトレンチをあけたが、花崗岩の巨岩が見られただけで、北尾根線上ではこの1基を調査したのみである。3号墳を除く4基の古墳は現状で墳丘を認めることが非常に困難なものであった。周辺にはなお巨大な花崗岩が無数に露出しており、あるいは未確認のままの古墳があるかも知れないとの一抹の不安を残す。

なお、1・2・5号墳は全面を人力で発掘、3号墳の一部および4号墳は重機で表土掘削した。また、樫の巨木が墳丘上において土層観察ができなかった部分がある。

石材はすべてを記録していないが、ほぼ花崗岩といってよい。この周辺には巨岩の露頭があり、また、山麓にも累々とした花崗岩の露頭がみられる。

1) 遺構と遺物

1号墳

調査区内の最高所、標高77m付近に位置する小古墳。これは立木伐開後に露出した石室を発見してそれと判った。仮に石室が見えなければ試掘溝を開けようとは思わず、見落としていたとほぼ断言できる地勢にある。その場合には後述する2号墳も見逃していただろう。

墳丘 (図版16・17、第27・28図)

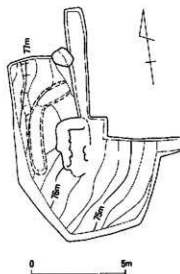
土層観察の結果は盛土を認めることはできず、すべて流出したようであるが、主体部西および北側の一部で幅1m前後、深さ0.5mほどの周溝を検出した。その平面形状は方形に近い。

また、石室中軸線から周溝内側肩までの距離は2mに満たないもので、墳丘規模も4mに満たない小規模なものであったと思われる。

主体部 (図版17、第29図)

主体部は天井・右側壁を失う以外は比較的に残りがよいといえる。後述する玄室部の平面プランは長軸1.5m前後、幅は0.5～0.8mとなって奥壁が若干広くなる。全長は約2m。

左側壁を見ると、3枚の腰石が玄室に相当する部分を構成し、その上部に架構した石材の上面が揃うことから、これがほぼ天井石の高さを示しているであろう。右側壁も同様の構成が考えられる。最前列に配置された石材のうち、右側のものは後世に動かされるようであるが、左側の石材の配置から見て本来的に玄門部よ



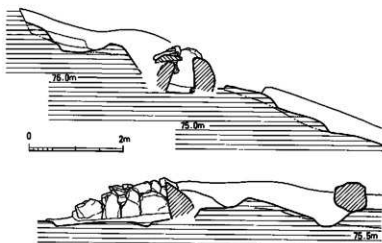
第27図 1号墳調査後地形
測量図 (1/200)

り広がっていたようである。奥壁は一枚で構成されたと思われる。

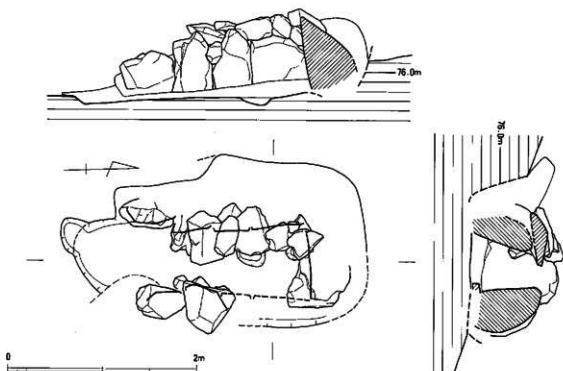
石室内に壁体の一部と思われる石材が転落していたが、敷石と確認できるものはなかった。

墓道は図のように発掘したが、表土直下に位置することもあり、いささか自信のないものである。

出土遺物は皆無である。



第28図 1号墳土層図 (1/80)



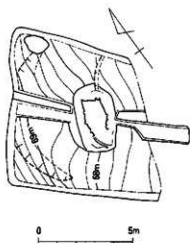
第29図 1号墳石室実測図 (1/40)

2号墳

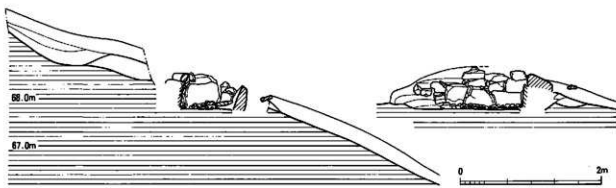
1号墳を認めたために、そこから尾根線上に断続的にトレンチを開けてこれを確認した。これも現状ではとても古墳の存在を窺わせるような地形ではない。

墳丘 (図版16・18、第30・31図)

これも孟宗竹の根茎が密生する表土から人力で掘削したこともあって、墳丘盛土を除去してしまい、土層で確認したに過ぎない。斜面に直角に残した畦の観察では、石室中軸線から2~2.3mにかけ



第30図 2号墳調査後地形測量図 (1/200)



第31図 2号墳土層図 (1/80)

で傾斜する層位が認められることから、これが盛土であったと思われるが、土質は互層になったものでなく黄褐色のはほぼ一様な、軟質のものであった。石室東側では同1.3m付近で盛土と思われる土層が切れていた。したがって、これも墳丘は4m前後の規模に復原できる。

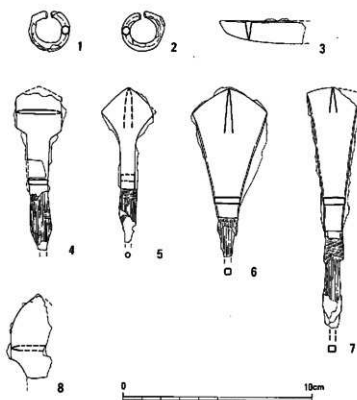
奥壁背面では玄室奥壁から1.4m付近まで盛土らしきが認められるが、この付近は地山(?)中に焼土を多く含んでいた。排土処理の都合もあって面的な広がりを確認していないが、古墳築造時の地業(祭祀)に関係したものであろう。

また、つけ加えれば、この古墳では石室周辺を略平坦に掘削して石室を設置、盛土を施したものである。したがって、地山を掘削した周溝は存在しない。

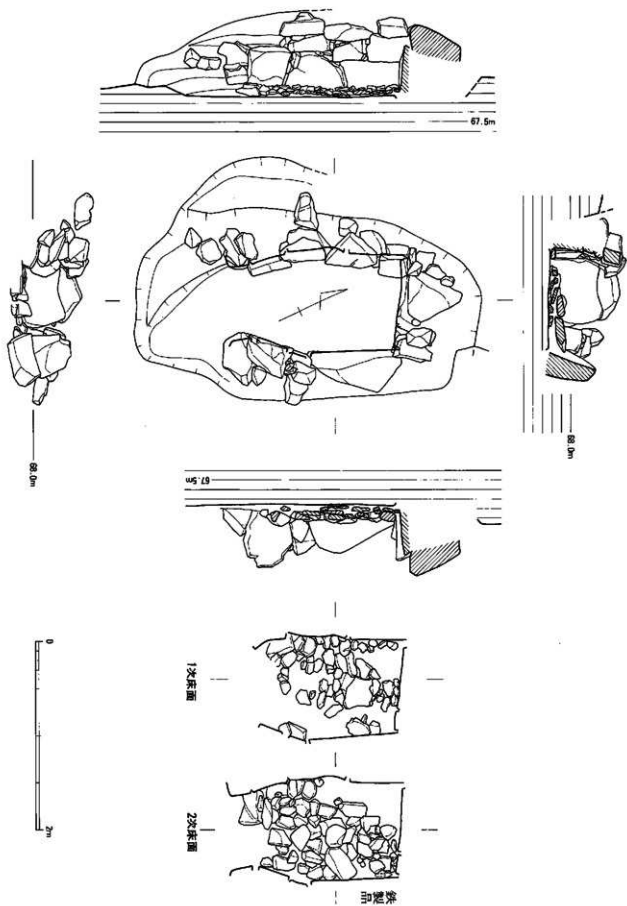
主体部 (図版18・19、第33図)

左側壁は3枚の腰石が立て据えられ、その前面は貼石といったものである。右側壁では1枚に比較的大型の石材を使用するが、やはり3枚が立てられた状態であり、この部分が玄室を意識するのであろう。その玄室部の規模は長軸1.5m前後、幅0.8~1mとなつて、やはり奥壁が若干幅広となる。ただ、1号墳と異なつて平面プランで両側壁が緩く弧を描く、また、最前面の石材が玄室と一連の延長線上に配置されることも異なる点である。墓道貼石も攪乱されているのか、非常に粗雑なものである。

ここでは床面の敷石が2層で検出されたが、いずれも粗雑な感のものであった。



第32図 2号墳出土遺物実測図 (1/2)



第33図 2号墳石室実測図 (1/40)

出土遺物

玄室右側壁に沿って、奥壁に近い部分で鉄鏃を出土した。切先を奥壁に向けていたようで、下層の敷石上にあるが、上層の敷石も粗雑であり、必ずしも所属を断定できない。

耳環（図版33、第32図）

出土位置の特定ができていない。1・2はセットとなりそうである。いずれも外径約2.1cm、環径0.4cmの大きさである。中実で、全体に緑青を吹くが、本来被覆していたであろう金銀は見えない。また、緑青を欠く部分（破損部）は暗茶褐色に発色する。

鉄製品（図版33、第32図）

玄室右奥で一括出土したもの。3は刀子切先の残片。4は鏃身が五角形をなし、刃部は錆のためにはっきりしない。幅広の筥が続き、茎には木質と樹皮が一部に残存する。5は三角形鏃であるが、これも錆のために大きく変形する。6・7は圭頭式で、6は鏃身が小さい。また、これも錆のために膨らんでいて身の断面形状は判らない。8は鏃身が直箭形に近いが、先端が弧を描くもの。6～8は茎に木質がよく残り、筥の形状が見えない。

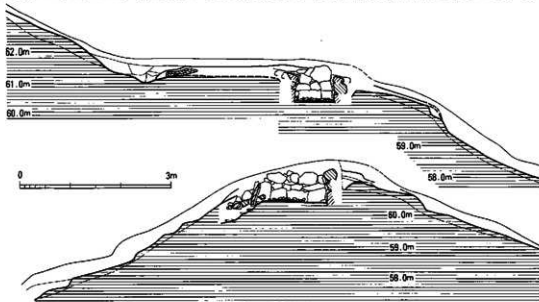
3号墳

立木伐開前の踏査段階で確認していた唯一の古墳。ただ、当初は昼なお暗い山中、「こんな急傾斜の所に単独で位置する古墳」ということで半信半疑でいたが、伐開後に最踏査したときには確信できた。墳丘上に数本の榎の巨株が存在したこともあって、北西部は表土を剥いでいない。

墳丘（図版20・21、第34・35図）

現況では12mほどの円形に傾斜変換点が認められた。

東畦では盛土裾がはっきりしないものの、石室中心から4mの付近で地山が削り出されており、これを墳裾として良からう。西畦は墓道に近く設定したために盛土裾は中心から2mほどの距離を測るに過ぎない。また、ここでは地形が急傾斜で落ちていることもあって、地山変換点を指摘するのが困難である。ただ、石室中心から4.8m付近以西は地山面が比較的平坦となることから、この

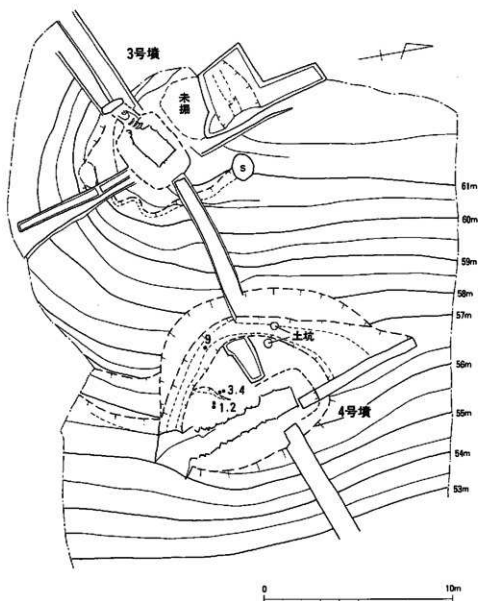


第34図 3号墳土層図（1/120）

付近を墳裾と意識していたのかも知れない。その場合は東西長9m弱に復元できる。

一方、北畦では石室中心から7mを隔てて周溝の肩が検出されたが、巨株があってその南（内）側を確認できていない。ただ、トレンチ南端付近で石屑のような小礫の堆積があり、これを墳裾とすれば中心からの距離は4.6mを測る。南畦も地山削出しの肩部を株のために確認できなかったが、その裾を認めることができたので推測は可能である。ここでは中心から4mの付近まで盛土がなされ、地山成形がなされている。したがって、3号墳は直径9mほどの円墳に復元できる。

なお、北畦の東では良好な状態の周溝を検出できていない。

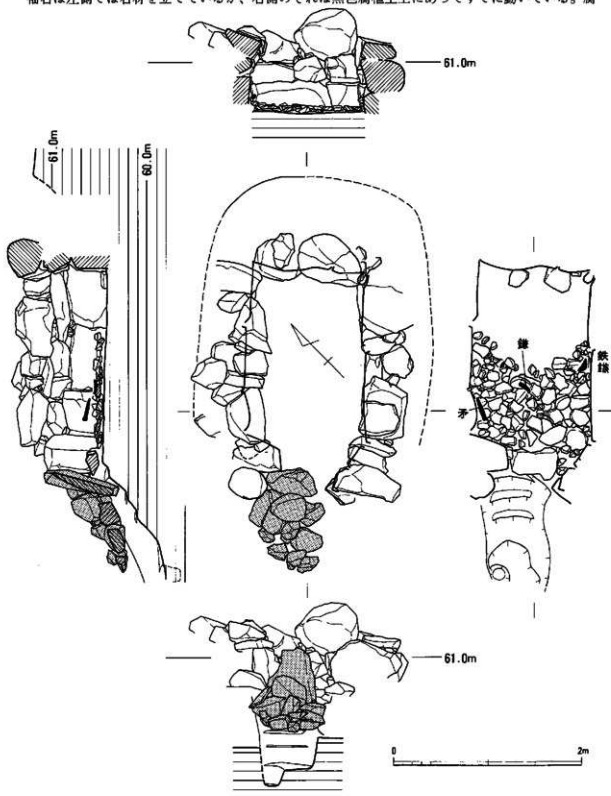


第35図 3・4号墳調査後地形測量図 (1/200)

主体部（図版21・22、第36図）

玄室は整ったプランを呈するが、玄門付近では粗雑となり、袖石前面にはほとんど石材が施されていない。奥壁から袖石までの規模は長軸1.7m、幅1.2mを測り、高さは最大で0.5mほどが遺存する。腰石は左側壁で3枚、右側壁で2枚を使用する。

袖石は左側では石材を立てているが、右側のそれは黒色腐植土上にあってすでに動いている。腐



第36図 3号墳石室実測図（1/400）

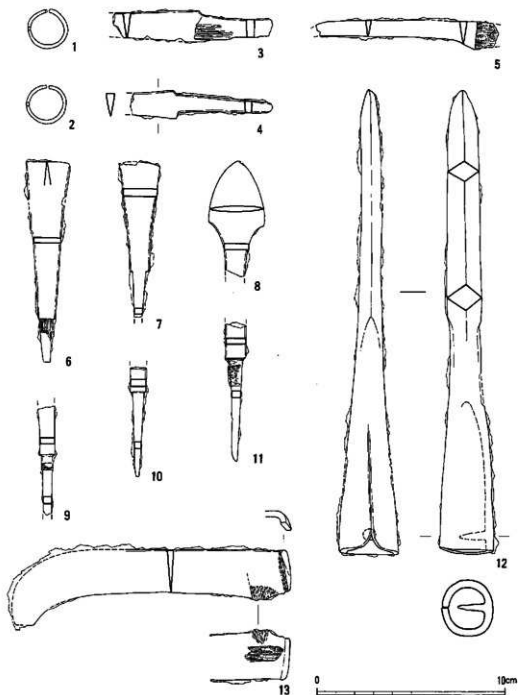
植土直上の石材が立っていたとしても袖石としては違和感のある形状であった。敷石は前半部に残存していたが、盗掘のためか粗雑な感を受ける。

ここでは板状石材を立てかけ、人頭大の礫で裏込めを行った閉塞施設が比較的良好に残る。また、入口部がかなりの急斜面に向くためか、墓道は階段状に成形されていた。

出土遺物

敷石上から鉄製品などが出土したが、原位置を保つものではない。

耳環（図版33、第37図）



第37図 3号墳出土遺物実測図 (1/2)

1・2は漆黒色を呈する銀製耳環で、奥壁付近で検出した。いずれも同様の形状でセットをなすのであろう。外径2.1cm、環の直径は0.2cmで、銀線を曲げたものである。

鉄製品（図版33、第37図）

3～5は刀子。3は脊に関を有するが、刃部から柄へ移行する部分は木質が錆着して不明瞭である。4は柄が完存するが、目釘穴は見えない。関は両関となる。5は関が極端に幅広となり、刃部が直線、脊が湾曲する形態。柄に木質がよく残り、関の形状は見えない。

6～11は鉄族。6・7は直箭式に属し、6は鍔身が8.3cmと非常に長い。8は三角形式で、鍔身は鎧をもたない両丸造りである。9～11は茎。10・11は先端までが残る。

12はほぼ完存する矛で、全長24.5cm、刃部長は左右の関の位置が若干異なるもののほぼ13cmほどである。袋部は断面円形を呈し、先端近くに柄を固定する釘が残る。

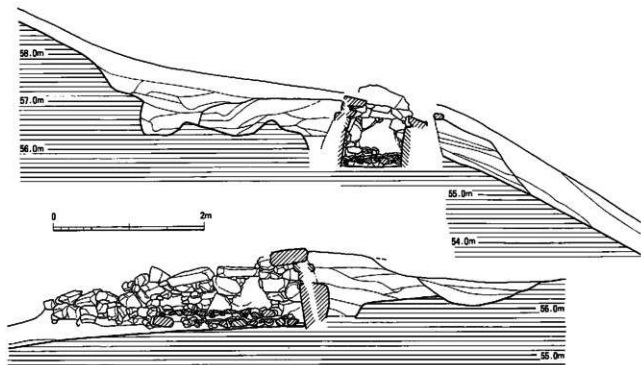
13は鎧で彫らむものの、全体が残存する録。基部の折返しは小さく、木質が付着する。背面では柄と直角方向の木質も見られる。

4号墳

立木伐開時にも墳丘にはまったく気付かなかった。木材搬出用の索条を固定するために残した立木の脇、索条が地面に接する部分に目をやって初めて三枚の石材が並ぶ様を発見、漸くそれが天井石と判ったものである。

墳丘（図版20・23・24、第35・38・39図）

現況では墳丘をほとんど認められなかった。露出した天井石を基準に斜面に沿う東西方向、そして奥壁背面の北側にトレンチを入れた。西トレンチでは大規模な掘削を行って石室を構築するための平坦面をつくるが、ここでは2号墳と異なって深く周溝を掘削する。加えて、通常では断面V字

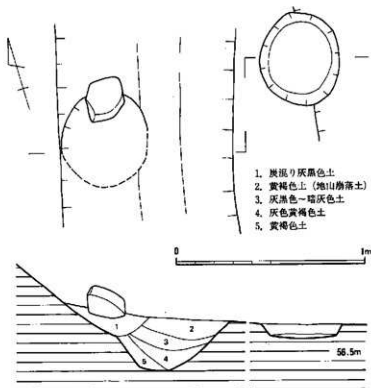


第38図 4号墳土層図 (1/80)

形に掘削する周溝が、ここでは凹字形に、シャープに掘削している。また、平坦面には床面に土手状の起伏が見られ、盛土の安定を意図したのかも知れない。ここから、東トレンチで認めた盛土裾までの距離は約7mを測る。一方、北トレンチでは奥壁から2.9mの位置で墳裾が認められ、ここでは浅いU字形の周溝が掘削されていた。墳裾から石室最前面の石材までの距離は約7mとなる。以上の土層観察の結果から、墳丘規模は7m前後に復原できる。

また、周溝内で土坑を検出している(第39図)。1基は周溝底

がある程度埋没した後に掘り込まれたもので、直径50cmほど、深さ20cm弱の規模をもち、断面形状は楕円形となる。内部には炭混じりの灰黒色土が一様に入っていた。いま1基は周溝の内側、地山成形面に掘り込まれたもので、規模はやはり直径50cm弱、深さが10cmに満たない円形プランを有する。この埋土については記録を怠っている。



第39図 4号墳周溝内土坑実測図(1/20)

主体部(図版23・25～27、第40・41図)

上記したように天井石3枚が露出していて判明した古墳であるが、内の2枚を危険防止のために重機で除去した。したがって、図示した天井石は最奥部の1枚のみであるが、石室を窺うに不足はなからう。掘形については西および北トレンチで確認したのみで、平面的には把握していない。

石室は全長6m強を測る本古墳群中最大のものであるが、玄室長は1.5mほどに過ぎない。また、玄室幅は奥壁で1.1m、袖石付近では1.4m前後となる不整形プランを呈する。

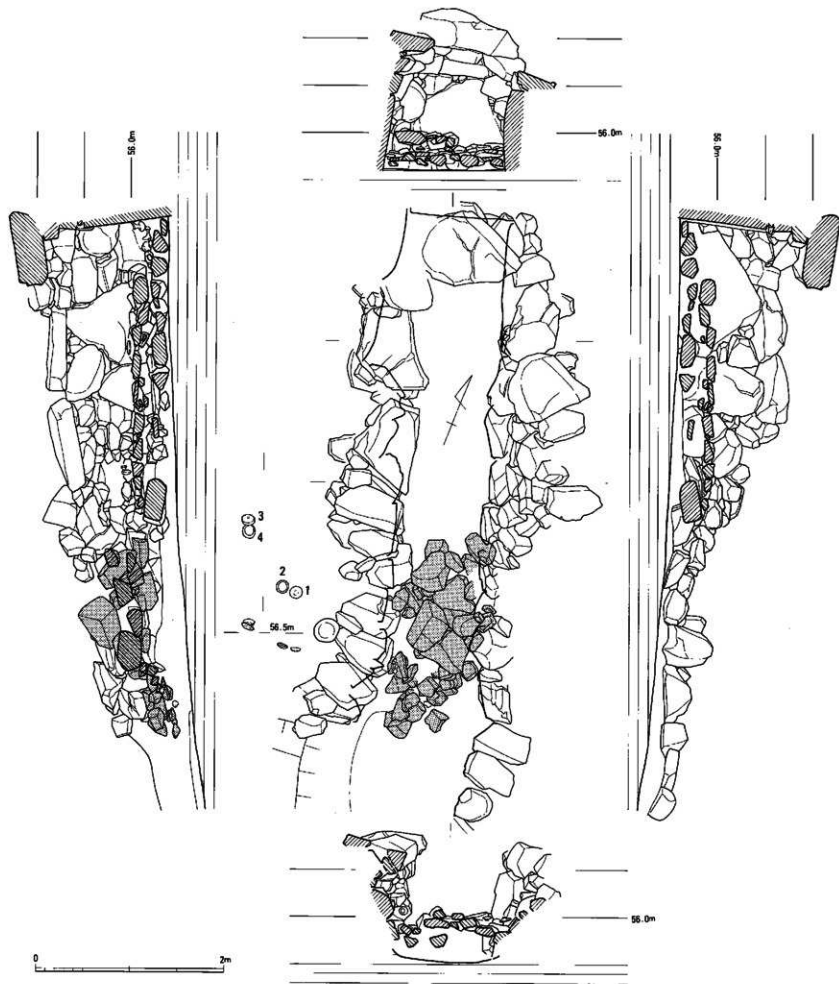
玄門部は左側に袖石を立てて一旦狭まるが、右側では袖を意識したように石材を立てるものの張り出しは見られず、平面的には片袖となる。

露出していた天井石は袖石上まで架構されていたものだが、その前面には天井を思わせるような巨石は見られなかった。ただ、敷石の施された範囲および非常に乱雑であるが、閉塞石の存在からみて、当然その付近までは羨道と意識されていたのであろう。

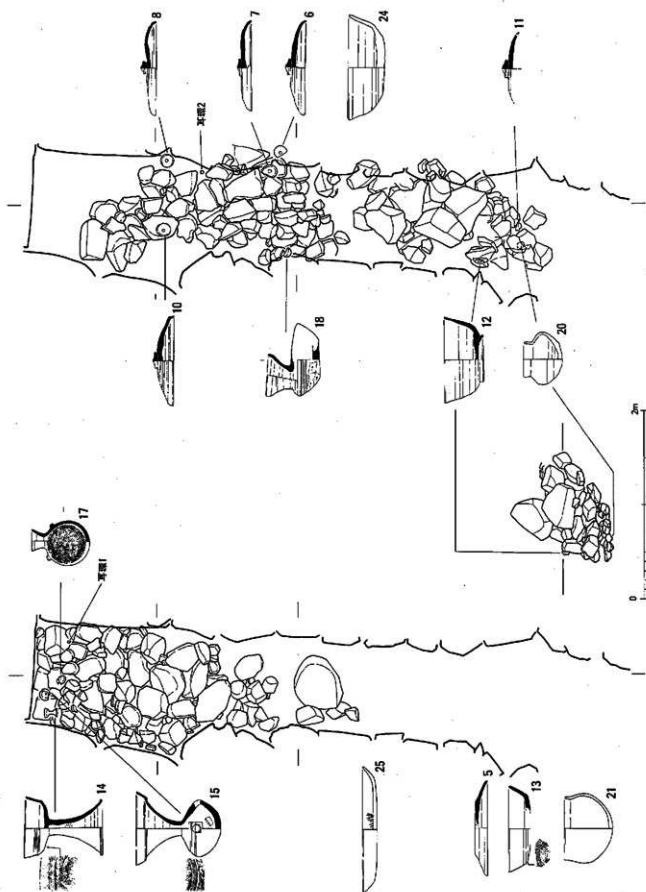
敷石はここでも2層にわたってなされていた。上層では奥壁付近で欠が多く、また、下層に比して乱雑なものである。下層のそれも決して丁寧なものとはいえない難く、特に前半部で雑な感を与える。

出土遺物

本遺跡で唯一、かつ良好な状態で石室内外から土器をかなり出土した。中、1～4は石室の墓道左



第40图 4号填石室实测图 (1/40)



第41图 4号墳出土遺物実測図2 (1/40)

壁背面の墳丘下、掘形上面でセット関係を保った状態で出土したものの（図版31、第40図）で、古墳構築時の地鎮に供されたものであろう。9は周溝中で、6・8・10・14・15・17・18・24・25が石室内、5・11・13・20・21が墓道埋土中から出土、それら以外は墳丘周辺で採集したものである。一部に「墓道・周溝」と注記されたものがあるが、注記時の混乱と思われるのでこれは出土地を特定できないものとして扱う。

また、耳環の中、1は下層敷石上で検出したが、その付近は上層の

敷石を欠いている。また、2も同様であるが、上層敷石の間に落ち込んだ状況にも見える。したがって、両者ともに確実に下層敷石に伴うとは断言できないものである。3・4としたものは出土地を特定できないが、上層敷石検出時に検出している。鉄製品はいずれも原位置を特定できないもので、これも上層敷石検出以前に出土したものである。

耳環（図版33、第42図）

1～4は耳環でいずれも中実である。1・2は外径2.3cm、環径ともに全体に緑青を吹き、一部に金が残る。0.5cmのほは同人でセットをなすものであろう。3はやや小型で、外径2.1cm、環径0.4cmの大きさである。これも全体に緑青が吹き、内側のみ金が残る。4は外径2.6cm、環径0.7cmと最大のものの。以上の耳環から最低3人が葬られたといえる。

鉄製品（図版33、第42図）

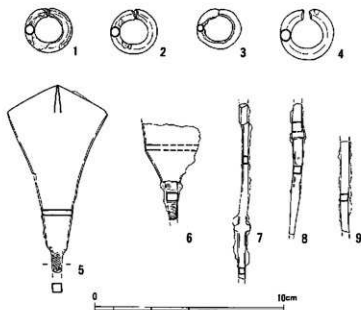
5～8は鉄製。5は大型の首頭式鉄で、間部までの鐵身長は8.5cm強、厚さは0.3cmほどである。6は錆のために膨らみ、欠損部が多い。7～9は茎の残片。7には棘状突起が見える。

土器（図版34・35、第43・44図）

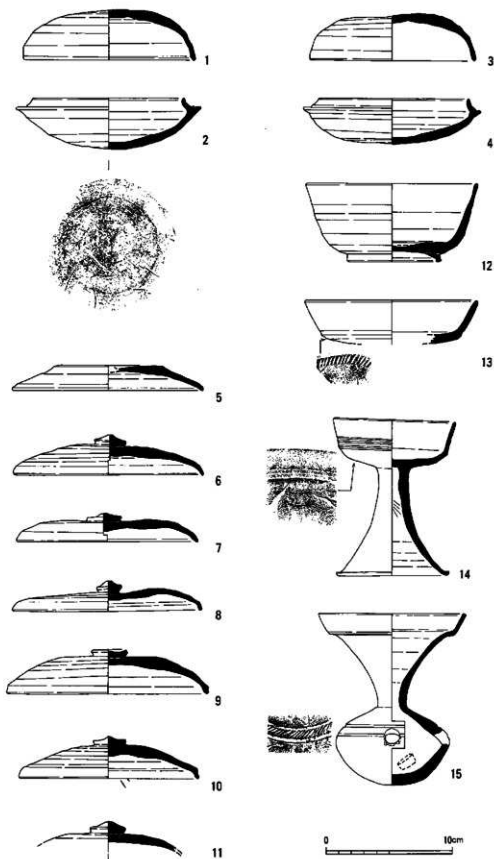
1～19が須恵器、20～25が土師器、26は瓦器あるいは黒色土器である。

1・2、3・4は出土状態からも、胎土から見てもセットとなるもの。いずれもほぼ完形である。1は口端部に小さな鈍い面をもち、天井・口縁部界は窪ませて画する。2は受部を部分的に欠いているが、丁寧に造られている。外底面に繊細な線で×の範記号が刻まれる。3・4は先の2点と胎土・焼成ともに異なるが、この両者は同様である。3は口縁部の一部を欠き、調整は雑な感がある。口端部は丸くおさめられ、天井・口縁部界も意識的な作意は見られない。4は受部の一部を欠き、立上りガリの基部に沈線を施す。これらの2セットは形態・大きさともに若干異なるが、出土状態からみて確実に同時期に使用されたものである。

5はつまみと体部のほぼ1/2を欠く。天井部はシャープに、丁寧に横撫で調整され、口縁部は直線的にのびるが、端部は小さく内彎気味に丸く終わる。6は瓦質に近い焼成不良の製品で、口縁部が

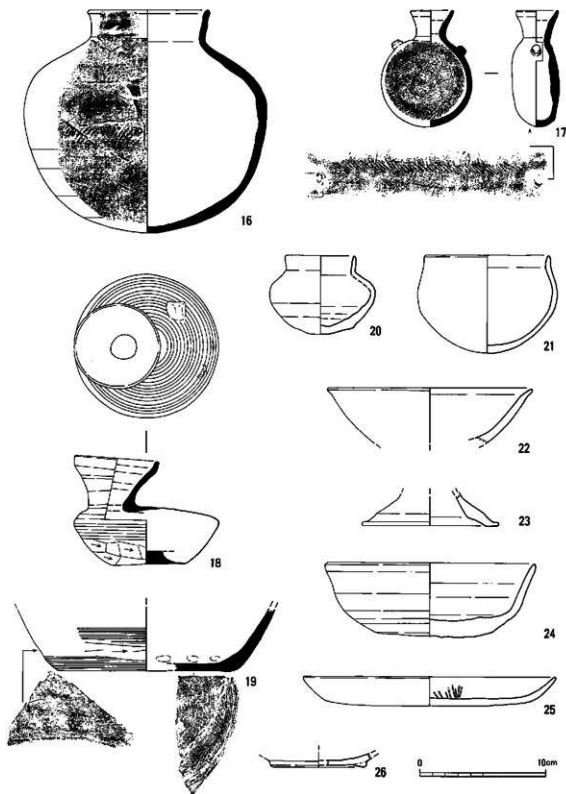


第42図 4号墳出土遺物実測図1 (1/2)



第43图 4号填出土遺物実測図2 (1/3)

明らかな内彎形態となる。調整は丁寧に、天井部に回転施削りが観察できる。7はやはり口縁部が内彎して終わるもので、天井部は不定方向の施削りが施される。8の口縁部は内彎というよりも屈曲する感じで、接地部が直角に近い角度で曲がる。焼け歪み、一部に亀裂が入る。天井部は回転施削りで仕上げ、そこに高台らしき熔着痕が残る。9・10は口縁部が明らかに屈曲、外面に彫面をも



第44図 4号墳出土遺物実測図3 (1/3)

つタイプ。9は1/4の残片であるが、天井が丸く、全体を横撫で調整する。10は口縁部から天井部への移行が直線的である。天井部は回転斲削りで調整され、全体に丁寧に造られた土器である。11は天井部の残片。灰白色を呈する生焼けの製品で、外面に回転斲削りが見える。

12は高台付杯。底部がほぼ完存し、口縁部付近は1/2ほどが残存する。体部下部は回転斲削りで調整し、丸味をもって、直線的な口縁部へと続く。高台は貼付されたもので、接合部に空隙が多い雑な造りである。調整は全体に丁寧になされ、焼成は甘い。

13は高杯の小片。口縁部は直線的にのび、屈曲部直下にカキ目原体の刺突を巡らす。14は完形の高杯で、杯部小片が墓道から出土した。口縁部は外唇気味に高く開き、脚部の開きが小さい。脚端部は外上方へつままれる。杯屈曲部直上に3条の不揃いの沈線を、直下には刺突を刻む。脚部中に凹線があるようにも見えるが、確信を持っていない。

15は口縁部の1/2を欠くほかは完存する。頸部が非常にくびれる甕で、口端部がほぼ水平な面となる。口縁部・頸部は無文だが、屈曲部直下に沈線を刻んでいる。ただ、これは非常に目立たないものである。円孔直上に凹線で画した文様帯を付し、カキ目原体の刺突で装飾する。なお、体部内に円孔部と思われる陶片が落ち込んでいる。

16は完形に復せる個体であるが、「墳丘・南西表土」との注記があり、出土状態の記憶がないので詳細は記せない。直口縁をもつ短頸甕で、体部の一部に叩きが見えるがその上半は横撫で、下半は丁寧に斲削りで調整される。焼成は甘い。17は小型完形の提甕。側面形もほぼ左右対称であり、片側に4重の刺突文を刻む。18も完形の平甕で、体部に比して口縁部が大きい。カキ目が顕著であるが、体部下半は回転斲削りで仕上げる。19は表土から採集した壺の小片。体部下端付近の一部に回転斲削りが施されるが、それ以外は図で底部とした部分まで含めてカキ目で仕上げる。

20は横撫でや回転斲削り、内面の水挽き様の痕跡など成形・調整、そして器形も須恵器のそれと同じであるが、黒斑を有する酸化炎焼成という点のみで土師器としたものである。21は通有の土師器で、頸部が非常に鈍い。全体を丁寧に撫で調整した小片である。22は高杯杯部、23は同脚部の残片。22は口端部を小さく外方へ引き出して、内側に面を造る。内面は丁寧に撫でて仕上げるが、外面には無数の指頭痕のような小さな凹凸が見える。23は接地面が大きく、脚端部が小さくつままれる。24は碗で、これも轆轤を使用して成形されたようである。底部およびその外縁は回転斲削りで調整されるが、焼成は酸化炎で灰赤褐色に発色し、黒斑をもつ。底部が肉厚で、造りが雑な土器。25はかなりの破片が残るが接合し得ない。全体に撫で調整され、内面は見込みから体部にかけて連続的に施された暗文が密に、不規則に施される。

26は約1/3が残存する。器表・器肉ともに大部分が暗灰色～灰褐色を、高台の一部が酸化炎焼成の灰赤色を呈している。器表も荒れていて判然としないが、黒色土器であろうか。

5号墳

上記したように単独で位置する小古墳で、当初はまったく存在に気付かず、トレンチを開けて漸く発見したものである。発見したときは古墳とはにわかに思えない花崗岩の集積であった。

墳丘（第45図）

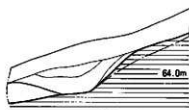
トレンチ調査で石室を発見、石室のみを露出させたために、墳丘規模等の把握は不十分である。

トレンチの土層観察では先の2号墳同様、尾根線を大きく掘削して平坦面を造成、その内部に主体部を設置し、盛土を施した様が見える。周溝の最大幅は2m強、深さは1mほどで、埋土のほとんどが黒色系の腐植土層である。ちなみに玄室中心からこの墳裾までの距離は約2mを測る。また、奥壁背面（北側）の壁面でも盛土・周溝が観察された。当然ながらここでは周溝の規模が減じるが、埋土にはやはり黒色系の土が入り、盛土にも灰黒色の土が被さっていた。ここでは玄室中心から墳裾までの距離は約2.5m前後となる。したがって、直径4～5mほどの規模に復原できる。

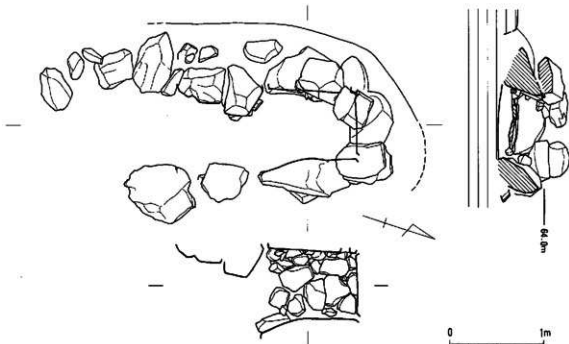
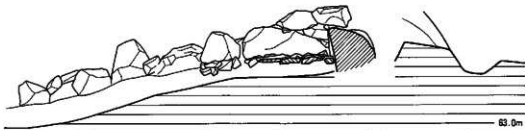
墳形については材料をえていない。

主体部（図版32、第46図）

残存長3m強であるが、墓道部分は原状を留めるとは思えない状況であった。玄室はかろうじて様子が見える。奥壁・左右両側壁



第45図 5号墳調査区と周溝土層図（1/200、1/80）



第46図 5号墳石室実測図（1/40）

ともに腰石を1枚石で構成し、規模が幅0.7m、長さ0.9m前後を測る非常に小型の石室である。

左側壁では立て据えた袖石を突出させるが、右側壁は玄室から前部を破壊されていて判然としない。敷石はよく残っていた。

その他の出土遺物（図版36、第47図）

帛属の不明なものなどをここにまとめた。但し、1・8は4号墳周溝中から、6・11は2号墳西側で表採したもので、他は注記がない。

1・2は弥生土器。1は底部が円盤状に剥離する。2では外面に煤が付着する。

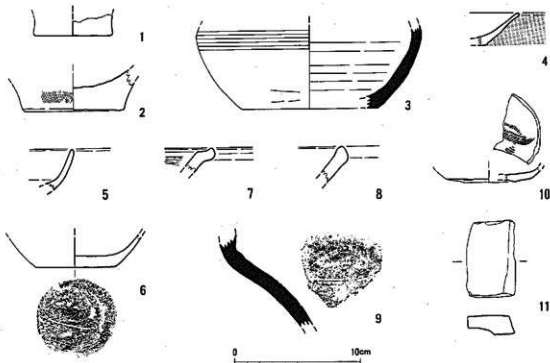
3は丘陵裾で採集した須恵器小片で平瓶であろう。体部最大径付近にカキ目、同下端部に回転施削りが見える。焼成は甘い。

4～8は土師器あるいは土師質の土器。4は外面に赤色顔料を塗布した杯の小片。黄白色軟質の土器で器表が荒れる。5は体部が内彎する杯あるいは碗。黄褐色を呈する。6は回転糸切り痕を残す底部。底径6cm強である。7は口縁部を屈曲させて端部をつまむ鍋小片で、黄白色を呈する。8は口縁部を肥厚気味に仕上げる摺鉢で、黄褐色を呈する。

9は器肉が緑帯びる灰色を、外面に施された釉が茶～深緑色を呈する陶器で、備前焼であろう。外面に水平な直線および山形の弧線を2条1単位の原体で刻む。

10は同安撫系青磁皿。釉は青みを帯びる透明に発色する。

11は砥石片。青灰色に近い粘板岩製で、図上面と左側縁の一部の二面が使用されるが、そこには条線は見えない。図下面の凸出した部分に不定方向の細線が無数に走るが、平滑とはならない。



第47図 その他の出土遺物実測図（1/3）

2) 小 結

古墳の造られた時代

これらの古墳の中でその使用された年代を限定できるのは4号墳のみである。その墳丘下から出土した須恵器壺杯は小田富士雄氏のいうⅢ-B期に属するもので、近年の各氏の論考では6世紀後半でも末葉近くに比定されている。これが築造時期を示すことは間違いない。また、石室や墓道から出土したつまみを有する蓋・高台付杯などは7世紀末～8世紀前半頃に比定されるものである。甕や高杯はどうであろうか。築上郡大平村金居塚遺跡では古墳・横穴墓などで一括供献された状態の土器群が数例確認されており、そこでⅢ-B期に属する3号墳・4号横穴から出土した高杯に比して本例は脚部が長く、不安定な形態となっている。また、甕の口頸部についても同様のことがいえ、本例が後出的である。一方で、北九州市小倉南区天観寺山窯跡群の主体をなすⅣ-A・B期とされる出土品に類例が求められる。そこでの資料は遺跡の性格上破損品が多く、比較の困難な部分もあるがこれらをⅣ期に属するものとして大過なからう。

したがって、4号墳はⅢ-B期に築造、Ⅳ期に追葬がなされたものと思われる。一方、7世紀末～8世紀前半に比定する一群の須恵器壺や高台付杯、土師器碗・皿そしておそらく平瓶もそうであろうが、それらは先の時期からほぼ1世紀の時間差を有する。この時間差は追葬を想定するにはいささか長すぎるように思える。さらに須恵器壺杯を見ると、右側の3点が相近い形態を有するのに対して、左側のそれは若干後出的な形態となり、ここでも少なくとも二度にわたって使用しているようである。その使用方法が追葬あるいは祖先祭祀を示すものか判断材料がなく不明であるが、いずれにしてもこの古墳がほぼ100年余の間使用されたことは確かであろう。

横穴式石室について

1号墳は通常の横穴式石室に見られる袖石がなく、むしろ側壁より一段引いた位置に据えられた石材をもって玄室と羨道（墓道）の区別を意識しているのであろう。平面プランは九州唯一の畿内系横穴式石室といわれる大分市古宮古墳にも似るが、畿内に直結する有力氏族の墳墓と考えられるその形態を当地の1小古墳に結びつけて考えるにはあまりに唐突であり、かつ近隣に類例がない。

2号墳は前端が若干狭まるものの、明確な袖石をもたない。ほとんど玄室のみで構成された主体部といえ、これも一般的とはいえない。

3号墳は玄室の形態は整うものの、やはり袖石は右側で判然としなない。しかし、左袖石は明瞭なもので、右側が壊れていることを勘案すれば、本古墳群中で最も整った平面プランを有していた可能性もある。形態からみて築造時期が最も遅いものであろう。

4号墳は全長こそ最長であるが、玄室規模から見れば3号墳に劣り、平面プランも乱れている。袖石は左のみが明瞭に迫り出し、右側壁では石材を立て据える使用法は通有のものであるが、地滑りを考慮してもなお平面的には小さな膨らみでしか表現されていない。

5号墳は非常に小型の石室で、成人をそのまま埋葬したとは考えられない規模である。

以上の中で、おそらく3号墳が最も古く築造されたと考えられるが、それでも「6世紀後半」という表現を越えるものではなからう。袖石が退化した様を呈する古墳に厚川町木山平遺跡4・5号墳が

知られる。4号墳では長さ4m近い羽子板プランの石室を石障で二分して前・後室を区画し、櫛石で石室、羨門・墓道を画するが、平面プランで見ると袖石は不明瞭となる。出土土器の上限は小田氏のⅣ-B期に相当する。5号墳は全長3m余の小型石室で、後ろ3枚の石材を立てて、その前面の2基を横据えして玄室を区別している。平面的にはほぼ長方形を呈し、袖石の張り出しは見られない。これは須恵器高杯1点を出土するのみであるが、ほぼⅣ期としてよからう。

また、行橋市竹並遺跡で調査された石室墳や横穴墓も参考になる。そこでD-2号墳とされたものは方形の外護列石の一部に残す一辺8mほどの方形墳で、主体部は全長4.5mの無袖の横穴式石室である。石室幅は1.05～1.3mを測り、奥壁部で最も狭小となる。盗掘を受けているが、小田氏のⅣ-B・Ⅴ期の須恵器を出土する。また、多数を調査した横穴墓の形態変遷では「5期」をもって玄室と羨道の区別がなくなり、平面プランで両側壁が連続的となるといい、その時期はやはり同Ⅳ-B期に比定される。

これらを参考にすれば、倉谷古墳群もⅣ期を中心とする時期に築造されたものといえよう。

註

- 1 小田富士雄「九州の須恵器序説—編年の方法と実例（豊前の場合）」（『九州考古学』22号、1972）
- 2 高橋護・小林昭彦「九州須恵器研究の課題—若戸山古墳出土須恵器の再検討—」（『古代文化』第42巻第4号、1990）
- 3 舟山良一「北部九州—生産地の様相—」（『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器—』、1997）
- 4 福岡県教育委員会「全筑前道跡 I」（『『筑前道10号巻前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集、1996）
- 5 北九州市埋蔵文化財調査会「天鏡寺山腹跡群」、1977
- 6 大分県教育委員会「古宮古墳」（『大分県文化財調査報告』第4集、1982）
- 7 厚川町教育委員会「木山平遺跡」（『厚川町文化財調査報告書』第2集、1988）
- 8 竹並遺跡調査会「竹並遺跡」、1979

IV. おわりに

以上が大鎧遺跡・倉谷古墳群の調査の内容である。再度、箇条書きにまとめる。

大鎧遺跡

○6世紀末葉～7世紀前半にかけての竪穴式住居跡を9軒余調査した。背後の丘陵に無数に築造された後期古墳と時期的に重複し、その造営の一端をになった人々の生活痕であろう。ただ、性格を特徴づけるような遺物は見られない。

○混入遺物に弥生中期～終末にかけての土器などがあり、卑近に該期の集落・墓地が存在するものと思われる。中に、瀬戸内系の土器が存在する。

倉谷古墳群

○急峻な斜面で、単室横穴式石室を有する後期小古墳を5基調査した。これも6世紀後半～7世紀前半（中頃）に築造されたものと思われる。

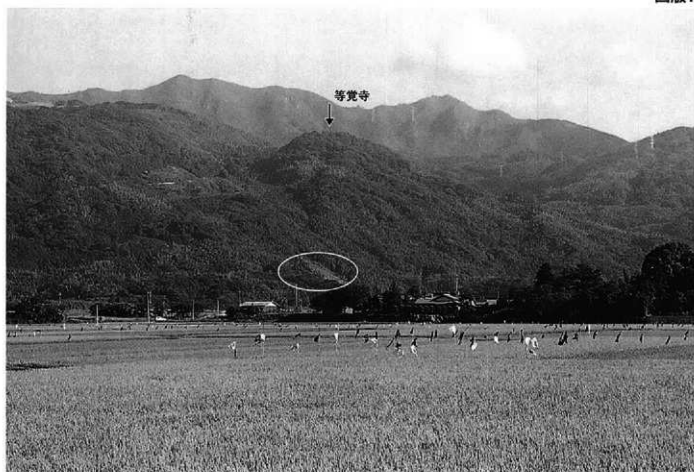
○遺物の中には刀子・鎌といった農耕具、矛・鉄鏃といった武器がある。農耕生活を営みながら、一旦これあれば軍事的組織に編入される当時の生活の一端を垣間みることができる。

この白川地域周辺の前方後円墳としては行橋市との町境付近に黒添メウト塚（墳長約40m）・徳永丸山古墳（同約40m）があり、近年新たに神後前方後円墳（同約35m）が確認された。いずれも6世紀後半代に推定されるが、発掘・測量調査は実施されておらず、出土遺物も知られていない。また、大小の古墳が無数に所在し、その立地はここで見たような急傾斜の山腹、低丘陵頂、山麓など変化に富む。そうした古墳の各種の要素、そして集落の在り方などを総合的に評価する中でやがて古墳時代後期の当地の様相が見えてくるのであろう。今回の調査はその第一歩となる。



白川地区の北を過ぎる山なみ

圖 版



倉谷古墳群遠景（南から）



大鍾遺跡遠景（東から）



全景（北上空から）



全景（北東上空から）



1号竪穴式住居跡（北から）



同カマド周辺（北東から）



2~7号竪穴式住居跡（北から）



3~5号竪穴式住居跡（南東から）



2号竪穴式住居跡（南東から）



3号竪穴式住居跡（北東から）



4号竪穴式住居跡遺物出土状態（南東から）



5号竪穴式住居跡カマド（南東から）



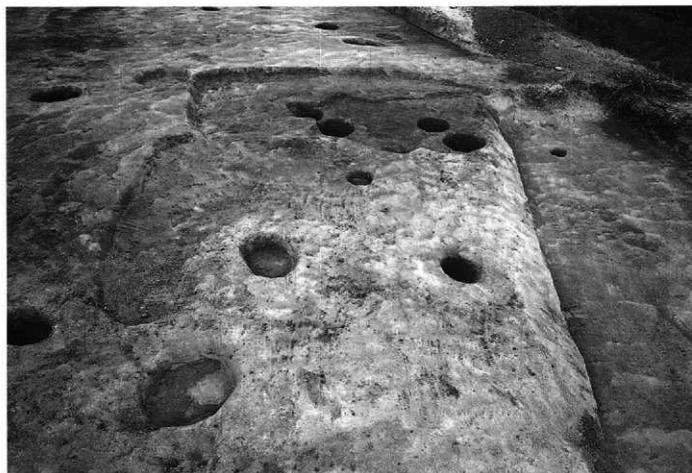
6号竪穴式住居跡（南東から）



同遺物出土状態（北西から）



8号竪穴式住居跡（北東から）



9号竪穴式住居跡（南から）



石戈出土状態（南から）



同（南西から）



J1-5



J1-6



J1-7



J1-8



J1-9



J1-10



J1-11



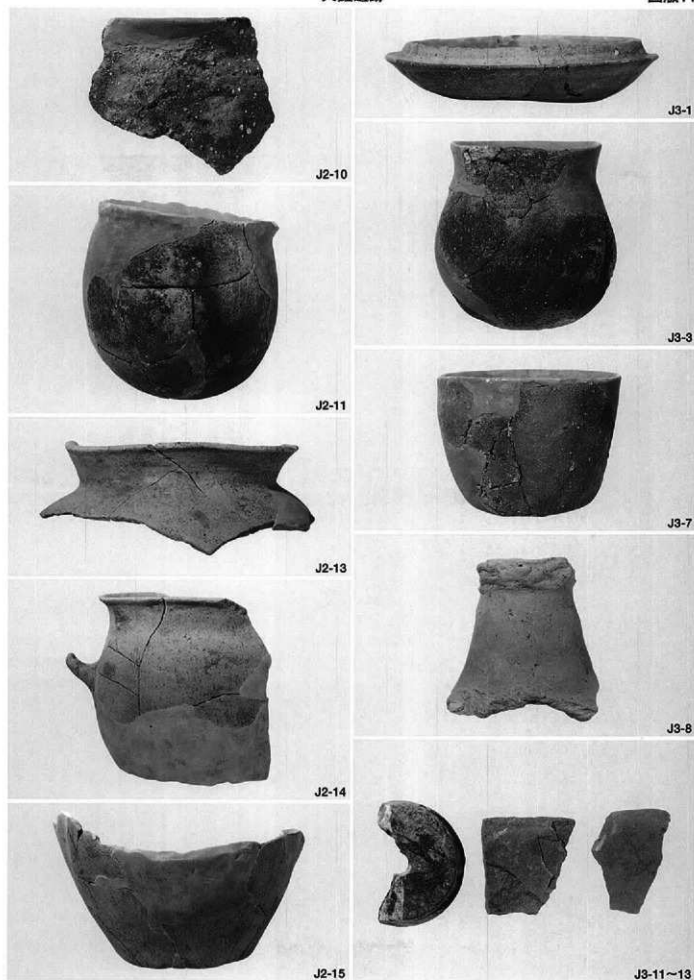
J1-12



J1-13



J2-2



出土遺物 2 (2・3号竪穴式住居跡)



J4-1



J4-2



J4-3



J4-4



J4-5



J4-6



J4-7



J4-11



J5-7



J6-1



J7-6



J6-2



J7-7



J6-3



J5~7-11



J6-4



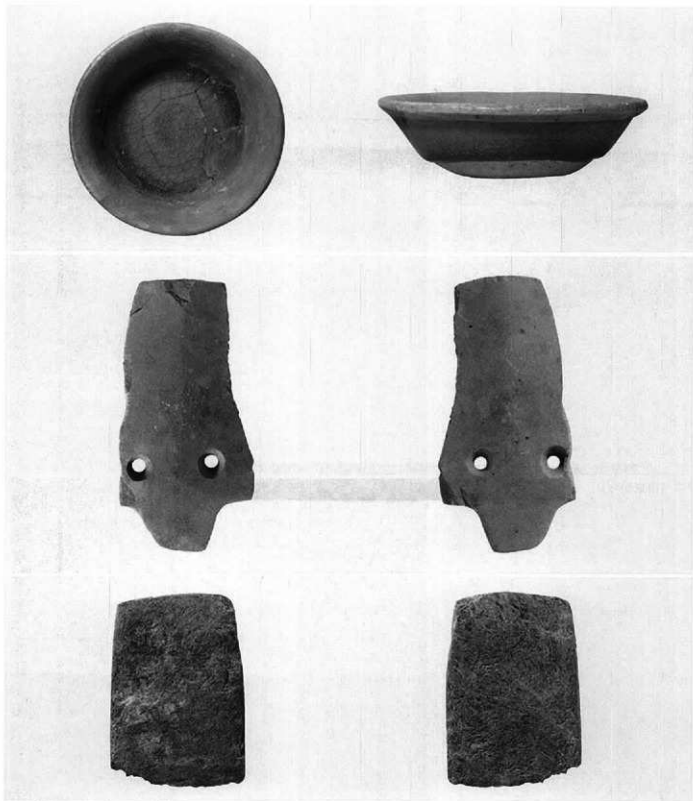
J5~7-12



J6-5



J5~7-17



出土遺物5(その他の出土遺物)



遠景（南東から）



全景（南東上空から）



1・2号墳全景（上空から）



1号墳現況（東から）



1号墳全景（南から）



同石室（南東から）



2号墳全景（南西から）



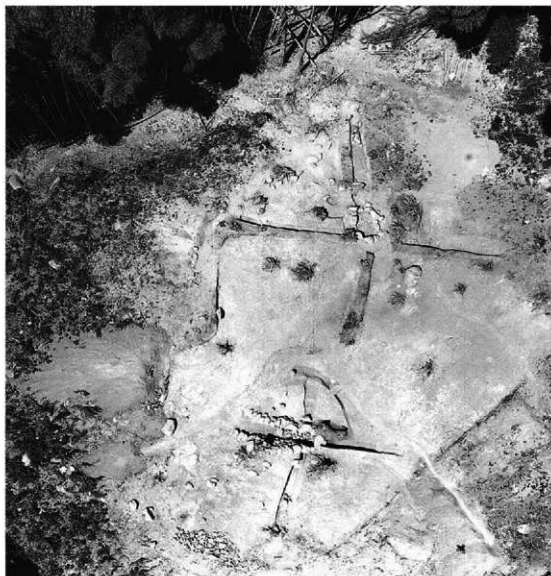
石室（第二次床面、南から）



2号墳第一次床面（東から）



同石室全景（南東から）



3・4号墳全景 (上空から)



3号墳現況 (北から)



3号墳北西トレンチ（西から）



同石室（南東から）



3号墳石室（西から）



同閉塞（南西から）



玄門（北東から）



4号墳現況（南から）



同天井石露出状態（北から）



4号墳西トレンチ（南西から）



同北トレンチ（北から）



4号墳閉塞状態（南東から）



同部遺物出土状態（北西から）



4号墳石室（南東から）



同第一次床面（東から）



4号墳石室左側壁（東から）



同右側壁（南から）



4号墳石室内遺物出土状態（南東から）



同奥壁付近（南東から）



4号墳石室内左側壁付近遺物出土状態（東から）



同右側壁付近遺物出土状態（南から）



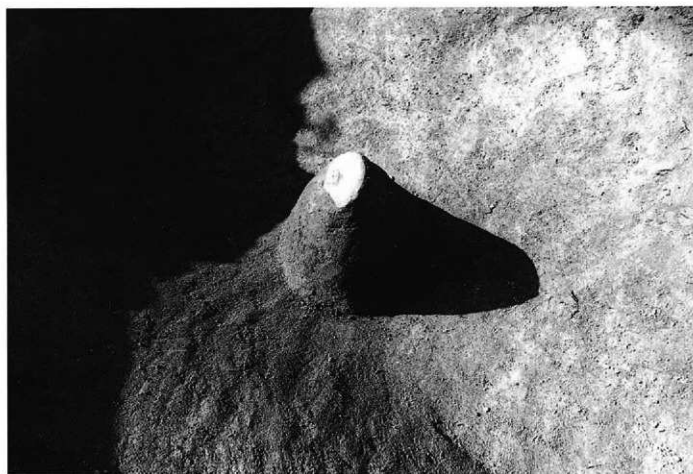
4号墳第一次床面奥壁付近（南東から）



同遺物出土状態（東から）



4号墳墳丘遺物出土状態（南西から）



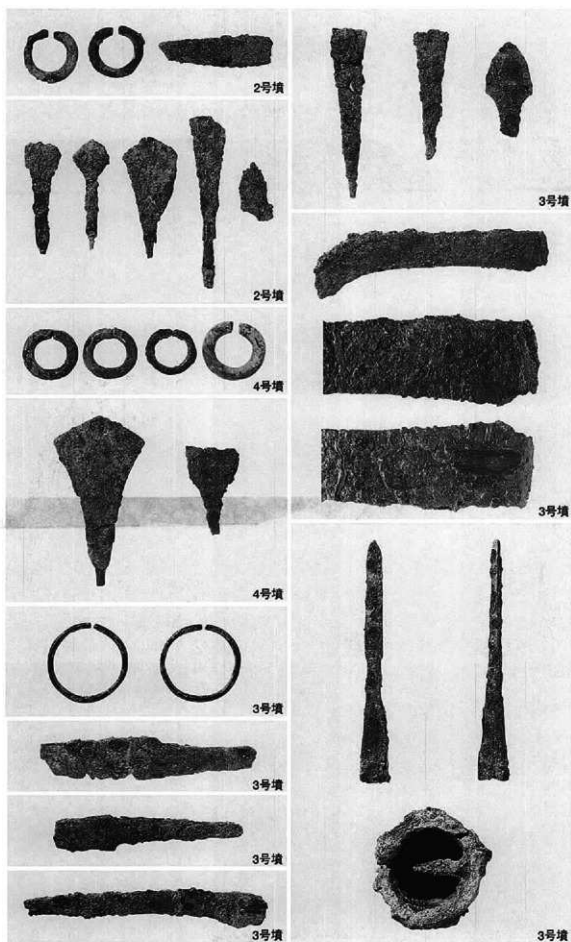
同周溝内遺物出土状態（南から）



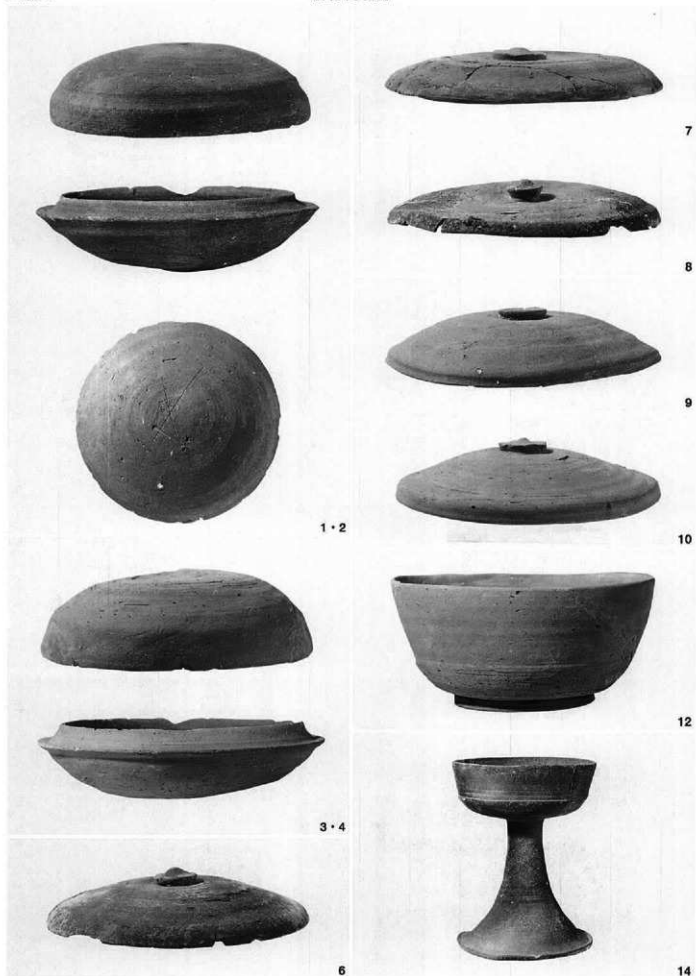
5号墳全景（南東から）



同石室（南東から）



出土遺物 1 (耳環・鉄製品)



出土遺物 2 (4号墳出土土器1)



15



16



17



18



20



21



24



第47図-9

報告書抄録

ふりがな	おおよろいせき・くらたにこふんぐん							
書名	大鑑遺跡・倉谷古墳群							
副書名	主要地方道刈田探銅所関係埋蔵文化財調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第140集							
編著者名	飛野博文							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7-7 ☎092-651-1111							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大鑑 おおよろい	福岡県京都郡 刈田町大字山口 1693番地他	406210	900187	33度 45分 19秒	130度 56分 2秒	1994.10	約600㎡	主要地方道刈田 探銅所 線道路改良工事
倉谷 くらたに	福岡県京都郡 刈田町大字山口 1760番地他	◇	900192	33度 45分 24秒	130度 56分 1秒	1996.5 ～ 1996.8	約700㎡	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大鑑	集落	弥生時代 古墳時代	敷布地 竪穴式住居跡9軒		土器・石戈・石斧 須恵器・土師器・石製紡錘車			
倉谷	古墳	古墳時代	横穴式石室墳5基		耳環（純銀製を含む） 鉄製品（鉄・矛・鏃・刀子） 須恵器・土師器			

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 10	登録番号 4

福岡県文化財調査報告書 第140集

大鑑遺跡・倉谷古墳群

平成11年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 大野印刷株式会社

福岡市博多区榎田2丁目2番65号